

藝苑裝劍奇賞

卷上

198
3
403

198-403
1200800020425



裝劍奇賞 卷上

198
3
403

大 狂 刻 之 奇

浪華芝翠館
藏板



大正
8. 10. 2
購求



賞
大
藏
板
浪
華
芝
翠
館



大正
8. 10. 2
購求

裝劍奇賞 叙

荆山之璧有卞和氏而知焉豐城之劍有雷煥氏而識焉若夫不獲二子則照察之美終朽衝斗之氣徒沒而已矣豈不惜乎々々然則荆璧豐劍却不是貴而二子之智識即是可謂世之至寶也於乎知也哉識也哉浪華聞人稻葉通龍其資性之所好自刀劍之裝具至凡金錢玉石及皮革羽毛之類皆能知之識之而賞鑑弗衍者卞之於璧雷之於劍不異也哉於是乎世人亦靡然以許焉云邇者著裝劍奇賞之一書以便於世之好事家豈可不謂有益之所業耶書成而後依弊門之徒烏山輔世者需公美之言公美深奇厥知識賞鑑之妙亡論乎爲東方之卞雷者而遂叙焉

天明紀元中秋

伏水龍公美書于鳧川三橋之爾雅齋

裝劍奇賞序

識鑒品定是人之所欲也而不以其法則不得也浪華有稻葉氏者夙嫻識鑒其能辨真贗察紫朱亦猶薛燭風胡之於劍卞和之於璧伯樂之於馬師曠之於聲易牙之於味也遂以此得名于都下者數年矣屬者欲弘傳其法於世而著書名裝劍奇賞其爲書也專爲賞鑒於刀劍裝飾之具設而傍附以皮革齒牙骨角玉木彫縷者琢磨者畫者髹者諸佩纒之物乃品定古今名器良工矣於是人咸可以得其所欲也譬之以規矩成方員不必婁明輪巧矣以予公事餘力間脩斯文特請一言以冠之夫識鑒品定者博物之一助亦君子之所欲也予既嘉弘傳其法也乃亦不以公事靡監謝其請也已

天明改元冬十月

東都源賴行書于浪華鈴木街偲怡軒

博識強記吾不之能也而有望焉孔子之辨犢羊萍實子產之對實沉臺駘一事博物韓蘇之號稱博學洽聞猶不知石鼓之書字文周僞古錯認周宣之物極口咏歌欽賞終不免識者之笑鑑定之難其不然乎蓋

本邦裝飾佩刀其多乃五金之英而其模象刻形山川人物羽鱗羸介鬣者角者衆卉群芳無不有焉至其良工精緻絕妙殆逼真矣恐不俾楮乘棘猴專美於古矣知者創之爲師巧者述之爲屯國工族工於是乎分等而差之價亦隨相倍蓰浪華稻通龍素名於鑑定頃著裝劍奇賞分類裝刀家系譜並加品騰以供識鑒之求

本邦之俗以佩刀爲君子第一儀服故飾之也記曰衣服在躬而不知其名爲罔不佞如猷者雖不能自識也因是書以得知其名不亦幸乎書以贈云天明元年夏六月

北海片猷撰

自序

あまねきおほんうつくしみのなみ、やしまのほかまでながれひろきおほんめぐみの陰、つくば山のふもとよりしげくとたへしにおとらざるおほん時にあひて、あきがしはうりかふもの、おほかるに、ますらをのとりはくつるぎだちを、なりはひとなすなん、あやしうかしこかりけれど、ちはやぶるつるぎてふたへはしき神は、おのがほどよそひかざりて、たふとみながむるなん、をさまれる世のみさほなりけらし、さるをいたづらにみやびごととそしり、あながちにすきものとのみいはんは、いとほいなし、おのれとしごろ此なりはひに心をいれて、これがふみかゝんことをねがへど、あき人のいとまなく、まいてふみの道うとあれば、ちやに物のみ思はれて、ひとつもいひ出んすべなきを、おもひかへせば、ことばうつくしう、

心たかうかくべき、ふみにしもあらず、此なりはひにおひたつわらばへがために、そなふべからんに、ものはちしてむなしうしはてざらなんは、くちをしかるべしとなん、心にしめしまに、書いづるに、おほよそたちかたなの事は、こもく、文そなはりて、さらにいふべくもあらず、めぬきふちかしらやうのものは、いまだくはしうもみえこず、これなん先おもむかんと、このたくみのひじり、後藤のなにがしよりこなた、名たゝるたくみのたくめるを品さだめして、あさちはらつばらかならぬをもかきつめ、やがて梓にもものせしなん、あき人のらあきじひながら、かくものせしこそ、あまねきおほんうつくしみの御代にうまれ、ひろきおほんめぐみをあふぐあまんのゆたかなるためしと、ありがたうかたじけなうおもふたまふになむ

なには人稻葉通龍

友人 近藤忠藏寫

装劔奇賞例言

一此書つとめて目貫小刀柄笄等彫物の作を鑑賞する事を要とすれども、凡目利は其人々の自得する所より出て筆して傳ふべからざるの理あれば、其益なきに似たれども、亦いふべき事のあれば、これをしるせり、よく其旨を考己が意に推擴て自得せば目利の助とならざるにあらず、是梓行におよぶ所なり、

一此書はじめに装劔家のこゝろえとなるべき、十が一を擧て多きをもらせしは、もはら彫工の名譜を撰するにあるを以てなり、故に後藤氏十三代より、諸工の系圖を出すといへども、猶名譜品題の條に於て、再び俗稱別號居住及び師傳を出すものは、事を丁寧にして探索に見易からしめんが爲に、其重複をいとばざるなり、

一凡彫工の銘する所の花押、其見及ぶものは盡く此を寫せり、又いまだ見およばず、或姓名居住等詳ならざるものは、知得て後書補べき料に、姑挾白を備へたり、

一彫工の名譜は、各其頭字を類聚す、其巧拙を以て次第するにあらず、索法は詳に奥にしるせり、

一名譜中其作を品題するに、名人といふは上也、上手とあるは其次なり、餘はすべて庸工に屬せり、名人上手庸工の事、總論の中にいさゝか愚見を述たり、譜中の品題此意を得て見るべし、

一此書目貫小刀柄笄等の名目盡く其原始を擧ざるものは、是故實家のあづかる所にして、商家の正すべき事にあらず、しかれども其かたはしを聞得たるはもらさんも又いかゞなれば、あへてこれをしるせり、唐突のおそれなきにあらず、

一 凡彫物のはじめは、後藤祐乗を祖とす、故に此を元祖と稱せり、しかるに祐乗より前に市川彦助の某ありて、鑿三本をもてはじめて彫物を工るよしひ傳れとも、世已に祐乗を以て元祖と稱すれば、復論を容べからず、但祐乗を元祖と稱する事は、後藤氏十三代の祖なるを以て、彼家よりいふ所にして、名工の餘徳といふべし、

一 職方に傳ふ所の、金具色上、滅金赤銅等、合せもの、法、或は其秘する所といへども、こゝに出せり、是商家に益なしといへども、家業を精くするの心得にもと、菜を買もの、多きをよるこぶの笑ひをそへたり、

一 此書釐て七卷其第六七の卷を附録として、佩垂の事を擧はじめに巾着筒亂に用る唐革類を圖し、其見様を注し、次に印籠師根附師の名稱を出し、又根附の圖を寫して評を加へ、終に緒の玉石をあつむ、一應今の世に遊び、或は商家に交易する所に至ては、遺脱する事なし、其奇怪の品に

於ては、知得べき所にあざれば、これをもらせり、

一 余十年許前に此書を纂述せん事をはかりしに、當時事故ありて、其緒に就ず、荏苒として年所を經といへども、これを畜念して忘るゝ事あたはず、しかりといへども、余が文筆のたしなみなく、更に商賈のいとまなきを以て、草を起す事を憚しに、おもへば馬齒已に加漸に半百に幾づかんとすれば、其志の遂ざらん事を、おそれ、客歳より家業も廢し、交遊をも謝して、此に稿を脱するに至れり、凡此書の類、向來いまだ全備せるものなし、余が謏陋を以てこれを備ふるにあらねど、此書幸に四方に流布し、達識の人補正あらば、遂に全備と稱せらるべし、倘其賜を蒙らば、余が功亦小なるにあらず、しからば、此に傲然として、撰述の名を冒もとむる、其罪をにくむ事なかれ、

天明改元辛丑五月

芝翠館主人春禽通龍識

裝劍奇賞總目

卷之一	總論	雜述
卷之二	諸工系譜	後藤氏家譜 <small>附同苗諸工</small>
卷之三	諸工名譜其一	
卷之四	諸工名譜其二	
卷之五	諸工名譜其三	彫工用具品目
卷之六	唐革類圖抄	彫工傳方
卷之七	根附師名譜并圖	名物鏝圖
	印籠師名譜	
	緒々玉石類	
已上		

裝劍奇賞

卷之一目次

總論

一 雜述

八

卷之二目次

彫工系譜

後藤家系	二二	奈良氏系	二六
橫谷氏系	二七	江州辻氏系	二七
加州桑村氏系	二八	加州後藤氏系	二九
同 水野氏系	二九	能州後藤氏系	三〇
越中富山若林氏系	三〇	京師宗田氏系	三一
同 植村氏系	三二	同 井上氏系	三二

京師保井氏系	三三	長州瀨城鐔工中井氏系	三四
同 岡田氏系	三四	同 仲原氏系	三五
同 岡本熊之允系	三五	同 岡本藤左衛門系	三六
同 藤井氏系	三六	水戶玉川氏系	三六
京師岡本氏系	三七	同 加藤氏系	三七
作州津山正阿彌系	三七	同 中川氏系	三八
同 千代氏系	三八	江府岩本氏系	三八
同 荒井氏系	三九	同 津氏弟子系	三九
加州象眼工小市氏系	三九	同 永良系	三九
同 國永吉重並弟子系	四〇	同 勝木氏並弟子系	四〇
同 定時弟子系	四一	同 辻山城守弟子系	四一
同 宗吉弟子系	四一	同 忠平系	四二

彫工名譜

後藤家並同苗諸工

後藤同苗諸工

同 勝木氏並弟子系	四二	阿州安田氏系	四四
同 河野氏系	四四	紀州金子氏系	四五
京師後藤氏系	四六		
後藤家並同苗諸工	四九	後藤同苗諸工	五八
彫工名譜			四八

卷之三目次

彫工諸家名譜

宗	七七	利	八四
重	八六	乘	八九
忠	九〇	安	九二
光	九三	芳	九九
知	九九	其	九九

如 弘 長 政 信 英 清 孫 尙 矩

一〇〇 一〇五 一〇六 一〇九 一一八 一二〇 一二四 一二七 一二九

直 序 久 正 陳 常 尹 有 則

一〇一 一〇五 一〇八 一一二 一一九 一二二 一二六 一二七 一二八

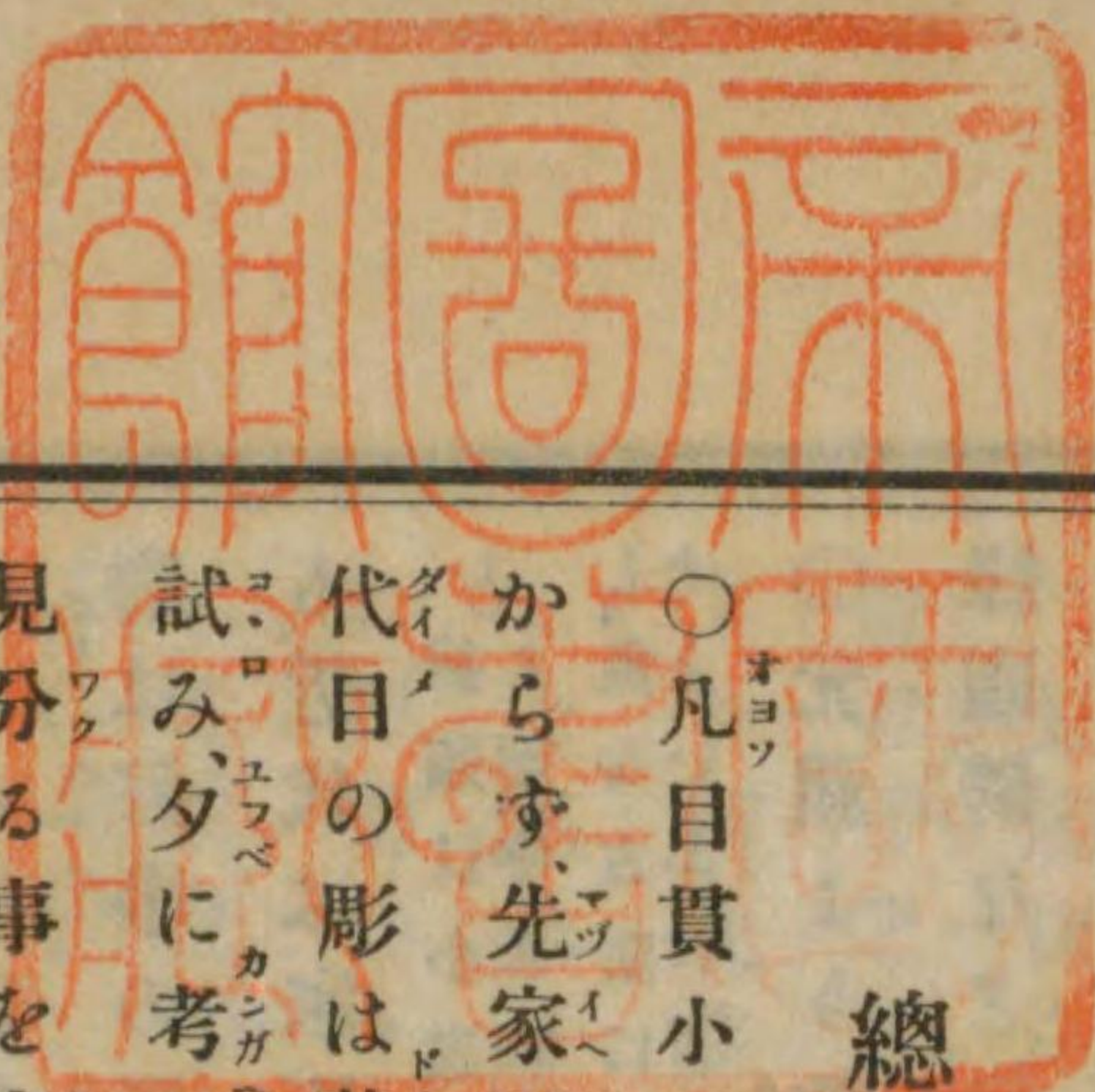
装劔奇賞卷之一

浪華

稻葉通龍新右衛門著

總論

○凡目貫小刀柄等彫物の作を鑑賞する事は刀劔の眞偽を辨するより難
 からず先家彫十三代の鑿の趣を熟と心に領して私に其約束を定めて何
 代目の彫は某の鹽梅何代目の鑿附にはかゝる氣象ありといふ事を朝に
 試み夕に考て一瞬に彰然たるが如くにならん事を工夫して後は他作を
 見分る事を自然に貫通するなりしかれども多く取扱ざる人は至てむつ
 かしきやうにおもへど左あらず家彫を盡く見覺すとも一作の鑿痕氣象
 其品の等位をよく見定る事を鍛鍊すべし是捷法なり其故はすべて名人
 の作は家彫にかぎらず氣象の高をあらはし庸工の彫は巧なりといへど



も、心持の卑に見おとる、此高といふ場を心に踏、目に熟せば庸工のひき、所は一臨して辨すべし

○家彫又は上代の作なる小刀柄笄の二所物は、必納子を蒔て地とす、納子蒔ざるは祝儀に佩べからざる事、猶鞍に海なきを用ると同例なり、石目地磨は好事の風流にして式日恒例の佩料には憚るべしといへり、しかれども、近代は家彫にも納子を蒔ざるもの見へたり、但縁頭は其沙汰に及ばずと縁頭は小道具にあらず、切羽繩等と同しく、刀装の金具なり、○納子を七子とよむ事、字義にはあたらす、其細點を蒔事、魚胎に似たるをもて、名づけたるなるべし、魚を古語にナといへば、魚子の義にて、ノをナといふは音便にて古言に其例少からず

○元祖より當代に至まで、目貫小刀柄笄より外、彫事なし、但徳乗の頃より、縁頭鏝など間見へたれども、至て稀なれば、必ず珍重すべし、近代古作の小刀柄笄の金紋などをはづして縁頭又は縁、或は鏝にかゝくるものあり、又新に下地より彫、色繪金紋毛彫物も作らるゝあれども、甚希なる事也、これ

其作るべき所にあられざれども、或は據なき求などにて、はからざるに出来しものゝ希に世に傳ふならん

○芳洲雨森先生曰、天下、伎藝各有四等、一曰偏多、二曰功者、三曰上首、四曰冥盡、君子之於道亦然矣、と今彫工を品題するも亦かくのごとし、余此編に評する所、先生の説によつて、三等を定む、天然に巧なるに、猶鍊磨の功を経たるを名人とす、是神境に至るともいへる第一等なり、次を上手といふ、上手に三等あり、名人に亞は上なり、下手より修行して、上手に至るは、工の本望にして、上手の中等なり、所謂下學して上達する是なるべし、又新奇を工夫して一時に稱せらるゝは、上手の中等にして、時をうしなへばすさみ見おとりするなり、右名人上手の外を、すべて庸工とす、庸工は庸工に終て、其庸一にあらざれども、概するに其心持のつたなきより出る所也、されば萬の工はこれを心に得て手に應ずる所にして、心の高ほど手にあらはるれば、

工めるもの、最はづかしき事にこそ、又鑑賞においても此こゝろもちひあるべし、利欲依怙の沙汰なきは心の高きなり、心の高きより目の直に應ずるは上なり、僻める心の眼にうつれば、おのれ見あやまるのみならず、必ず人をあざむくものなり、眼前の利を貪て生涯の損をまねく事多し、慎まざるばあるべからず

○昔の彫工は先鑿の法を其師に授り習熟して後、己が工夫を以て、一流の工となる故に、たとひ上手にあらざるも、自己の手際そなはりて、何となくしつとりと手づよし、後の工はしからず、偶古作のおもしろきを見れば、押形といふものにて、摸する事を丁寧にして、鑿しどろに彫もどろかし、からうじてみがき色上するとはや、自許してをこがましく銘を切したりがほに他をそしるたぐひ少なからず、すべての伎藝皆此類ならん、畫工などもしかり、名畫とよばるゝ人は師傳の筆法を習熟して後、古畫を數幅寫して、

其圖を作る事を工夫し、我筆を下すに至ては、古畫の妙にして企及がたきあたりを、意に擬して己が畫才をたすくるまでにそなへて、其寫せしまゝを摸する事なし、皆己が筆、己が圖なるが故に、具眼の人これを稱美す、庸工はしからず、用筆に心を入れずして、圖取にくるしみ、灰筆もて、小を大に、方を圓にする事さへ自由ならず、粘押といふものにて、古人の圖せるまゝを、小心になで、うつしなし、一も其意匠に出るなきにさもおもくしき落款する頭巾氣先生も間あり、是彼押形の名人と同價の曲者にして、ぬけめなき商人をもかすめんとするまざれものあれば、とかく目巧を鍛煉して、人をも身をも惑はしあざむかざる心がけこそ、小道具を取あつかふ正法眼なるべし

○むかしより一流を彫て、名譽を得し、宗珉乘意利壽安親など、在世已聲價高く、乞求人門前に市をなすがごときからは、家富て金銀を貯ふべしとお

もへど利慾に染ては、清稱を得る事のあたはざるは藝能なり、庸工の物を製するは、其日の手間づもりをもつて、其細工を仕立る故事十分に調はざれば、其賞日々にすたれて、果はあやしの古金店に漂泊する事無慙のさまなり、上工は今日の活計の爲に工とおもひながら、活計をわすれて、心のおもむかざれば、月をかさぬとも廢業し、心すゝめば夜を日に繼でこれを仕上る故、皆活機を得て、其作超妙なり、もとより價も貴しといへども、庸工の賤く賣よりは、利徳少しかの芭蕉翁が、白魚にあたひあるこそうらみなれとなげかれしごとく、名工も其價を論ずるを聞ば、さぞほいなうおもはるべし、されば商家の心もちにも、此場を工夫あるべし、金錢をあながちに貯んとねがふは、所謂守錢奴といふものにて、商人の庶幾する所にあらず、商人はひろく交易せん事を尙び、小利を積で大業を興ん事をおもふを本意とすしかれども、各其心のおもむく所ありて、品異なりといへども、其旨

は猶名工の清稱をもとむるにおなじかるべし、又かの守錢奴の屬は、金銀の通行して用をなし世の寶たることをさとらず自己の財とのみおもへる陰惡子孫にむくひて、遂に子孫の滅するに至ると、余商家にしてかゝる議論をこのむにあらず、往年或人の示されしを、わすれざるが故に總論の後に附して、後人に貽さんとす、取捨は其人の心によるべし
 ○十三代及び名人の作の出來よきものは、已に家々の珍藏となりて、商家の取あつかふ事は稀なる事なり、しかるにたま〜これを得て、主顧にすゝむれば、或は僻心得の人ありて、十分欣賞して求むべくおもへど、容易購ともいはず、先あづかり置て、他の商人に見せて、其買取べき價を問ひて、それよりやすく買んとするの人、間あり、是終に名物を得る事あたはざるのみならず、重器の位を賤くする罪人といふべし、すべて世にまれなるものを、珍襲せんとするも亦工の氣象を高し、商家の大業を興さんと希も其旨

同致にして、志の高きにあらざれば得がたきものなり、俗に掘出しと稱して、高名にのゝしるは、品高く心優なる人は、せまじき事にて、是商人の幸福にして毎にある事にあらずむかし駿馬の骨を千金に買しより、賢者を得たる故事もあれば、装劔は昇平をいはふ盛事なれば、分に應じて、是を飾らん事、奢靡に似て、奢靡にあらず、よく眞偽を辨じてこれを珍藏せば子孫の榮といふべし

襍述

○およそ太刀劔のかざりの事は、古記に散見し、或は故實しれる有識も聞ゆれど、今の刀脇差に用る小道具なるものゝはじめは、いづれの比、いかなる便宜をもて作りものすきけるにや、多くは太刀のよそひによれるものと見ゆれど、目貫ふちかしらなどの名稱等正しく考へ得べき事おぼつかない

かれど、中比の記録、又は近代の識者の考へおかれし、これかれを抄してこゝに出せり、今も禮方、又は工の家などには必ず傳來の秘説等ありて、間聞もおよべれど、家々に其旨も異に、或は陰陽五行に分配してことなる臆説などもまじはれば、すべてこれらの事を取らず、たゞ古記に見へたるかたはしを、左にしるせる也、猶遺脱の多からむ事を恐るゝになん
 ○目貫はもと目釘穴をつらぬきたる覆なり、白石先生の軍器考に委く見へたり、今は目釘と目貫とは別の物となれり、されば此名のふるく見へたるは、拾遺和歌集の神樂歌に、白銀のめぬきのたちをさげはきてならのみや、こをねるはたが子ぞとよめるは、銀装の太刀と昔いへるものゝ目貫なるべし、又鎌倉年中行事に、牛の目貫とあるは、いかなる製にや、今のごとき高彫の目貫は祐乘より起るといへど、其已前にもありしにや、考ふべからず、京都將軍の盛なりし比より、目貫にさまざまなるかたちをもつた

しより、今のごとく巧タクミを競キツふに至いたり、此物タウザン唐山にも似ニたる製セイのあるにや
しるべからず、或ヒツは鞆ヒツをメヌキと訓ヨミて、刀飾ノカザリ也といへれど、字書にも、刀飾モロコシと
のみ注チウして、其製ツマビラカ詳ならずれば、據ヨリドコロとしがたし、すべて此類タケヒジ字義ギの本據ホンコに及
びがたければ、下皆これを沙汰せざるなり、

○小刀柄オホザウシは、大双紙オホザウシに小刀柄オホザウシかねの鑲クワンありなどいへるや、小刀柄といふも
の、見へしはじめなるべし、腰刀の鞘サヤに、小刀を挿サス事サスいつの比ヒよりはじま
りけるにや、知るべからず、或アル説セツに、太平記の大塔宮ダイタウノミヤを害ガイし奉ホウる所に、淵邊伊
賀守が脇差の刀をぬきて、先御心もとのあたりを、二刀さすと見へし、脇差
の刀なるもの、今の腰刀の鞘サヤにさす、小刀なるがごとしといへり、又云、今大
和國にある所の、後醍醐ゴダイゴ天皇の御刀に、小刀はなけれど、今の小刀をさす
べき所に髪搔カウカイをさしたり、又八幡殿ハチマンテンの鞘卷サヤマキといふものに、小刀髪搔カウカイをさし
たるはとあれば、むかしも小刀をさせし事のあるにや、いまだ古記に小刀

を刀の鞘にさす事シヨケン所見シヨケンなしと、或或説説是又室町殿ムロマチドノの頃コトより、はじまれる事な
るべし、

○かうがいとは髪搔カミカキの義ギなり、かうは髪也、頭の殿ノをカサノトといひ、透垣トウケンを
便レキ倭名抄レキに、撥レキ髪レキセツと書カキて文選モンゼンを引ケイて勁ケイセツは理チサムル髪レキとありて、和名加美賀岐カミカキ
と見へたる是なり、寢覺記ネザメノキに侍従大納言ジジウの守刀マモリガタナよりかうがいアゲをぬいて、髪レキ
をつくろひしといへる事あれば、いにしへは髪をくゝり上アゲてかうがいアゲ
をとめたりと見へたり、整カントなど着キる時は、髪を亂ミダすゆゑ、かうがいアゲをば太刀
にさせる也、しかるに今俗ソクに、笄ケイの字ジをかうがいとよめるは、誤アヤマリなり、笄ケイは倭
名抄カミに加美左之カミササとありて、冠カウワリを挿サスの釘クキなり、但但此書但、やはり笄ケイの字ジを用ヨウるもの
ひて、見易見易からしめんが爲爲也、

○縁頭フチガシラと並稱ナラベシヨウする事未所見イマダシヨケンなし、但頭タマシといへるもの、日本紀に、劔柄ケンヘイ又劔頭ケンダウ
と書カキてタカミとよみたるあり、是延喜式エンギシキに柄頭ツカガシラといふものならん、中頃ナカエに

は冑カフトガネ金などもいへるよし、或説アルセウに見へたり、

○鐔ツバは倭名抄に都美波ツミハと見へたる、其義詳ツマビラカならざるよし、東雅トウガにしるされ、さて倭名抄サンシグ蠶絲具サニシグを引て、鍋字クワジをツミとよめるは、今俗にツムといふものにして、其物に輪ワあるを、又俗にツムハといふなりと、刀劔の鐔ツバ其制セイのよく此物に似ニたりければ、ツミハといひし也東雅以上されば、此物神代卷にも軻カ遇突智グツチを斬給キリふ劔ツルギの鐔ツミハより垂タルる血激越ホドバシリて神カミとなるよし見へたれば、ふる此名あるなり、又古記コキに鍊鑄ネリツブといふもの多く見へたり、或説アルセウに愛宕山アタゴにある尊氏將軍カタウヂの太刀も鍊鐔ネリツバなりといへり、太平記にも金の鑄コといへるも見へたり、

○櫛ハと書て、タチノツカとよみ、神代卷に太刀の手上タガミといふ、又多加比タカヒとも、多加タカ々比ヒともいへり、天照太神の劔柄タカミを急握給トリシバリふとあるを、釋シヤクに神代カミヨのむかしは劔の柄ツカをタカヒといふ、日向國風土記フガノに、宮崎郡高日村ミヤザキノコホリタカヒは昔天より

降クダれる神、劔柄ツカをもて、此地オキに置給オキひしによりて、劔柄村タカヒムラといひしを、後人アラタメ改カて高日村タカヒといふと見えし、即是也スナハチといへり、されど劔柄をタカヒといへるも、詳ならざるよし、東雅に見へたり、是太刀の柄の事をいへるなれど、刀脇差ツカにも同く柄ツカといへれば、此コに其原始ゲンシをしるせり、刀の柄ツカを絲イト又革カウにて巻マしり、よて今も故實コトノハジを存する家には、絲イト巻マならぬコトノハジ、大小紙コトノハジに見へたり、○鞘サヤは刀室タウシツナリ也ナリと、倭名抄に見へて、刀劔の身をば古言コゴンに佐比サヒといひ、やは屋也イヘ、小刀の屋イヘといふを略して、サヤとはいへるなるべし、日本紀ナニノキに七枝刀ナナエダといへるも見へ、萬葉集マンヤクにふたざやの家とつけ、新撰六帖シンセンロクテウにしりざや、かりざや、みせざや、さげざやなどの名も出たり、しかれども其制セイ今しるべからず、古事記コトワザに小刀コタガをサビとよめるは、小冷コヒヤの義なるべし、刀をヒエとよめる事は、又神代卷カムヤマトに見へたり、いにしへは劔ツルギをもサビとよみて、劔は劔ツルギの古名なるべし、又鞘ツキに附ツキたる具グに、栗形クリガタ、うらがはら、かへり、小尻コシ、鴨目カモメ等ナニ、各考ヨリドコロへ據ヨリとすべき事もあれど、文繁フシガければこゝに略せり、

○切羽は狭鑄といふを略せる言にて、はゞきといへるは脛巾の義にて、脛巾は今の脚絆の事也、刀劍の本を裹む事、脛巾に似たる故、やがてハツキガネの名を稱じ來りし也、太平記にも、ハツキとのみいへるは、久しく其名のいひならへるなるべし、

○下緒といふもの、或説にこれを往古に考るに、紐小刀といひ、ヒ首といふにつける、八鹽折の紐は、後世の鞘卷にある下緒なるがごとし、鞘卷とは是を腰に挿時、此下緒を帶の上を引こして、鞘に卷からむ故の名なりと、案ずるに、今の下緒是より出たるならん、

○金無垢の金、其位一にあらす、色よく見ゆれども、位あしく、色はさまで見えざれども、但色を上げざるを、素品すぐれたるあり、是を試るに法あり、目貫など一具をそろへて、掌中に入れ振るに、性すぐれず、堅氣は銀の雜りたるをあるものは、其音チン〜と聞ゆ、又純金はカラ〜とひやく、尤小ブリに

あつき目貫などは、位よき金にても、チン〜と鳴れども、しば〜振て得と氣をとめて聞時は、自然にガラ〜といふ音をなせり、是金のよしあしを試る捷法にして、手に一もあやまる事なし、附石にて試よりは、はるか
にまされり、

○同苗彫又は家彫にあらざるもの、至極よく出來て證文も出べきやと、後藤家の目利を請ふに、吟味不宜候、又作付不申候といふ、書付の添てかへりし道具を、装劍家にてなげられしといふ、此なげられしものには、かさねて外より鑑賞を求めても、そのまゝそれとしれるやうに、吟味鑿といふものを入て戻さるゝとなり、其鑿の入れ所、彼家の秘事なるべし、口傳
○柴垣に梅、或は竹、又は草花等の模様を割笄に彫たるを、大夫笄といふは、國大夫節の淨瑠璃をかたりし、宮古路哥内といふものは、はじめ彫物屋嘉兵衛といひし時、彫りたる故に名くといひ傳ふ、此哥内が子孫、日暮八太夫と

いひて、今も京都にて御免芝居株の名代なるよし、

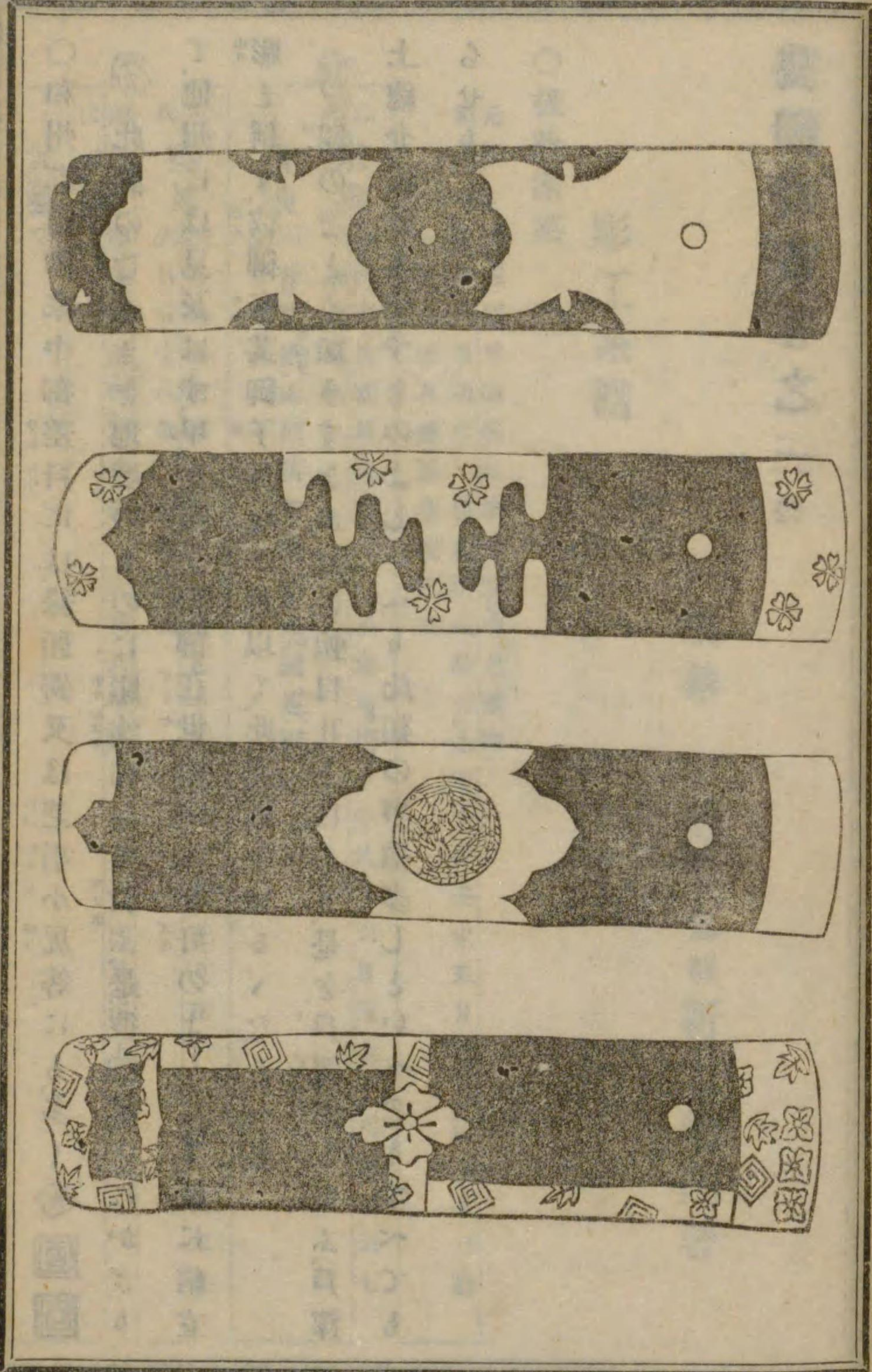
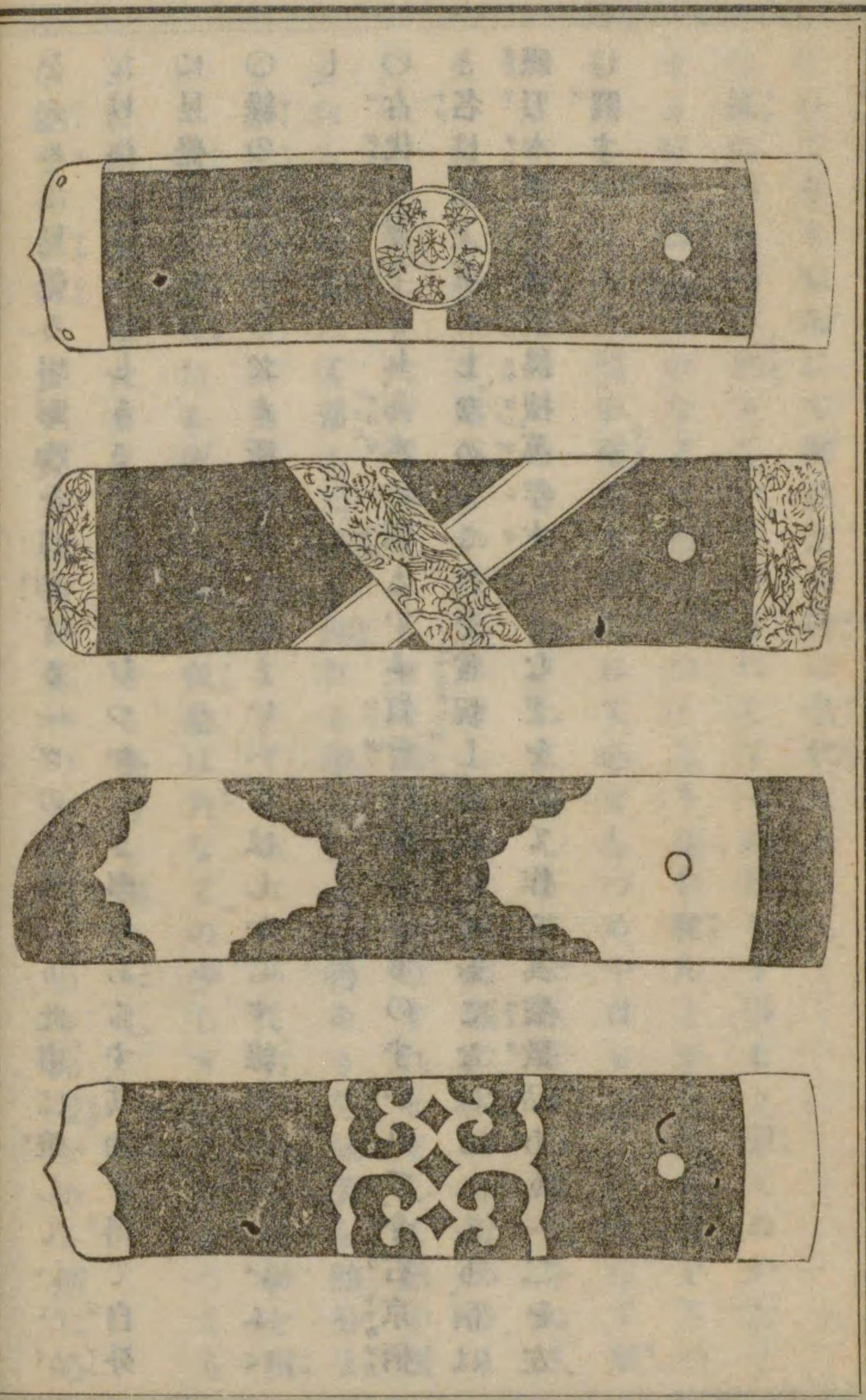
○縁の内へ頭の陥りて、いかやうにしてもぬけざる事あり、強てぬかんとする時は、烏金ものなどは損じ瑕つくなり、是を脱んとおもは、縁をうつむけにつまみて、頭の兩端を、指尖にて、心をしづめ、やはらかにいらひて居れば、いつとなくぬけるなり、これさして書しるすべきほどの事ならねど、えてはある事にて、迷惑すればこれをしるせり、猶此類の事あまたありといへども、煩しければすべでもらせり、或は烏金物のすれなどして色の損じたるを、硫黄にて補ふは、誰も知たる事なれど、心得あり、先硫黄を随分よく細末して、さて其烏金物を火にてとくとあたゝめて、右の硫黄の粉を指にて摺付れば、兀たる所、即色調也、但是は角などの少しすれたるをつくらふに用ふ、大に摩たるには、下に出せる薬方を用ふべし、




○納子の蒔方に江戸京加賀阿波等少づゝの差ひあり、此差ひある所に心


をとめて見覺る事、彫物を目利する一ツの心得なり、此事は筆していひがたければ、こゝにしるさず、さのみむつかしき事にあらず、其物を得て自分に見覺ゆべし、

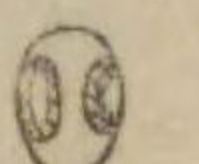
○縁の切羽へあたる所を、縁の底といへるは、しからず縁の天井といふべし、

○古代の妻手ざし、赤木の柄といふ、質朴の風よりものすかれて、今右京柄と名けて、上下おしなめてこれを賞玩し、盛に世におこなはるゝあり、柄は鐵刀木、欄木、紫檀、黒檀、萬年木、イスなどを以て作る、其製數品あり、一二を左に圖す、



○和州郡山御家中御差料には縁頭鏝又は芝引小尻等にも多く   

 此圖のごときを、地磨のものに彫沈にして装ふ、是彼御家中にかざりて、他州には見及はず、甲斐信玄公御在世の頃の物好のよしにて、世に信玄彫と稱す、彼御家其御子孫なるを以て、此遺風を尙るゝなるべし、

○  圖のごとく頭うすきが故に、鴨目孔上にあり、是を戸澤頭といふ、戸澤上總介様御ものすきのよしいへり此類の事猶多しといへども、すべてもらせり、

装劔奇賞卷之一終

装劔奇賞卷之二

浪華 稻葉通龍新右衛門著

彫工系譜

○後藤家系

元祖 祐乘 稱四郎兵衛任佐渡守號端之法印
濃州人以武仕 普光院義教公永正九年壬申五月七日没七十三歳
一云七十八歳追考諱正奥

二代 宗乘 稱四郎兵衛叙法眼位 永祿七年甲子八月六日没七十八歳一云七十歳諱武光

昌乘 一作尊乘或曰祐乘弟未知孰是斷絶
納子名人

三代 乘眞 諱吉久稱四郎兵衛 永祿五年壬戌三月六日没五十一歳一云二月六日五十八歳 菱後藤始

四代 光乘 諱光家稱四郎兵衛 元和六年庚申三月十四日没九十二歳

元乘

琢乘光宗
 石乘光經
 傳乘光廣
 乘巴光俗
 喜兵衛光生

五代 德乘諱光次後改正家稱四郎兵衛 寬永八年辛未十月十三日沒八十二歲一云八十四歲或曰天正九年辛巳 豐臣秀吉公賜食邑於某鄉云
 下後藤始

長乘一稱七兵衛
 上後藤始

立乘光賴

覺乘光信

乘圓
 乘仙
 源八

昌乘光政
 乘蓮光成稱伊兵衛
 善乘光則稱瀨兵衛

光質稱市郎右衛門

源乘一作寂乘法諱源實

演乘光英稱勘兵衛

達乘光房稱勘兵衛

實乘光雅

光令勘兵衛玄乘

光晴勘兵衛

光平清左衛門

光武三左衛門

益乘光治
 嶺乘光親稱源四郎或作光武

清乘光長
 順乘光明稱權兵衛

秀乘光豐稱權兵衛
 光教權之介秀乘

益信稱采女為探幽養子號洞雲叙法橋位一云覺乘子

海乘光綱稱三郎四郎
 隆乘光定稱七郎兵衛
 光甫七郎兵衛
 光浪七郎兵衛

六代 榮乘諱正光稱四郎兵衛 元和三年丁巳四月四日沒四十一歲一云四十三歲

七代 顯乘諱正繼一云正綱稱理兵衛 寬文三年癸卯正月廿二日沒七十八歲即乘以幼少預家督看坊

慶乘光詮稱源兵衛

休乘光忠
 運乘光如
 就乘光隆稱三郎右衛門

林乘光

法乘光

光信半左衛門

光敷半左衛門

源右衛門光
源太郎

代八 卽乘

諱光重俗稱未詳年十五嗣家督寬永八年辛未十一月十三日沒三十歲一云二十八歲

代九 程乘

諱光昌稱理兵衛或銘呈乘廉乘以幼少預家督看坊延寶元年甲子九月十七日沒七十歲

良清小判座良重

悅乘光邦稱理兵衛

光治源一郎

光倍理兵衛

光倫理兵衛

寬乘

光永後改光利

俊乘

光永稱八郎兵衛

快乘

光勝稱八郎兵衛

光興

八郎兵衛

光弘

八郎兵衛

般乘

光富

光黃

七郎右衛門

光品

七郎右衛門

光業

梅三郎

仙乘

光清稱太郎左衛門

源之允

為廉乘養子

卽清

稱三郎

代十 廉乘

諱光侶稱四郎兵衛十五嗣家督寶永五年戊子十二月廿三日沒八十二歲

泰乘

光尙稱治左衛門

乘與

光近

體乘

光寄稱治左衛門

乘賢

光嘉稱源四郎二月十九日沒二十九歲

代十一 通乘

諱光壽初稱源之允後改四郎兵衛實仙乘子廿七日沒五十三歲

光幸

源次郎

代十二 壽乘

諱光理稱四郎兵衛寬保二年壬戌二月九日沒四十八歲

代十三 延乘

諱光孝稱四郎兵衛天明四年甲辰九月十八日沒六十四歲葬淺草今戶乘光寺日蓮宗也

光佐

唯吉

代十四 光守

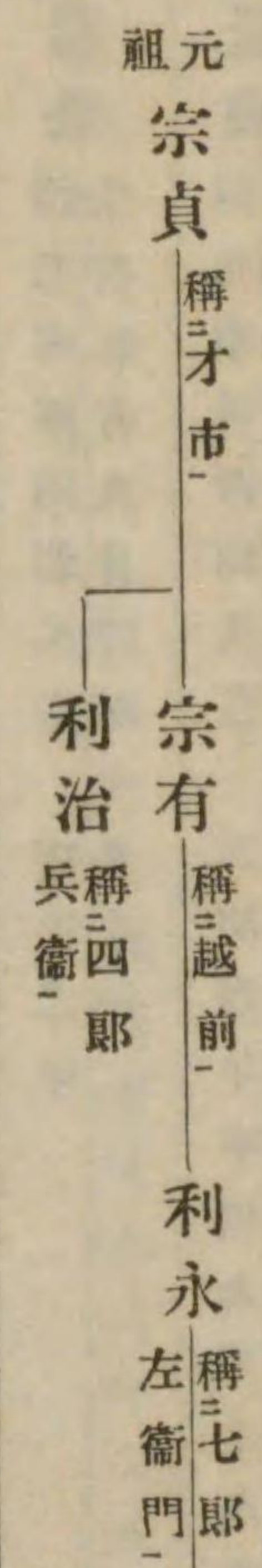
四郎兵衛初名光傳稱吉五郎天明四年甲辰十二月家督五十二歲

光典

吉次郎

○奈良氏系譜

右系譜ケイフキハメテ校正カクセイストイヘトモ同苗ノ系派ケイハニ至テハ猶差サ謬ビウア
 ランコトヲ恐オッル後ノ君子補正ホセイシ玉ハンコトヲネガフノミ、
オギナヒタマス



利光 號宗閑 左衛門

重治 稱重兵衛 利永弟子

利壽 稱太兵衛 利永弟子

正長 利永弟子 陳孝 弟 正長

正親 稱清六 正長子

正敷 稱善二 正長弟子

政隨 利壽弟子 稱太郎兵衛

兼隨 政隨子

矩隨 政隨子

正間 正親子

正重 稱新太郎 正親弟子

安親 稱彌五八 辰政弟子

乘意 稱太七善 三弟子

安信 安親子 後改安親

辰房 稱金平 安親弟子

常和 稱喜六 安親弟子

○横谷氏系

宗與 名盛次 稱次兵衛 (京師人) 寬永年中下江戶
 宗知 名次貞 宗與子
 宗珉 名友常 稱次兵衛 宗知子 御用御彫物工後辭御扶持

英精 稱伊右衛門 宗珉子 宗與兄

宗與 名友貞 明和三年隱居

忠兵衛 宗珉弟子 宗理 同上

宗珉 名友次 宗與子 當代

友武 稱傳三郎 友次弟

英充 號自立軒 宗與弟子 茂周 稱町田金藏 同上

○江州辻氏系

充昌

稱丹治號臨川堂江州坂田郡國友村住人御鉄炮工辻又左衛門弟終身不娶

常成

稱孫助號樂水堂充昌從兄弟

格亮

稱國友平四郎號水堂充昌從兄弟

完度

稱國友新四郎號永川堂格亮弟子

昌安

稱源七五十川氏號養松堂完度弟子

○加州桑村氏系譜

盛良

稱與四郎顯乘弟子

富久

稱小四郎程乘弟子

弘良

初銘古工稱佐右衛門法名淨空盛良弟程乘弟子

盛征

稱次郎三郎弘良弟子

盛勝

稱又四郎後改長右衛門法名宗順弘良弟覺乘弟子

盛弘

稱治平法名了由盛勝弟覺乘弟子

盛明

稱治平

盛審

稱清四郎盛弘弟演乘弟子

盛津

稱金四郎程乘弟子

盛禔

稱善次弘良弟子禔字未詳

克久

稱源左衛門法名序休

良弘

稱與三兵衛克久弟為弘良養子

○加州後藤氏系

市右衛門

名未詳顯乘弟子

清二郎

名未詳

詮清

稱七兵衛

久清

稱七兵衛

清左衛門

名未詳

清冷

稱七兵衛

○同水野氏系

源八

名未詳

源七

名未詳

照喜

稱源次家督

多光

稱源六自

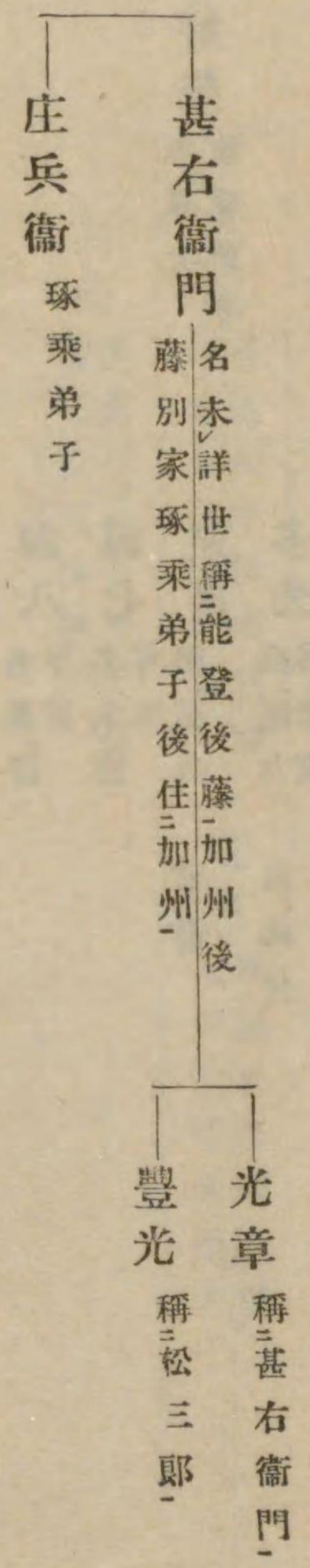
光政

初某後稱源六

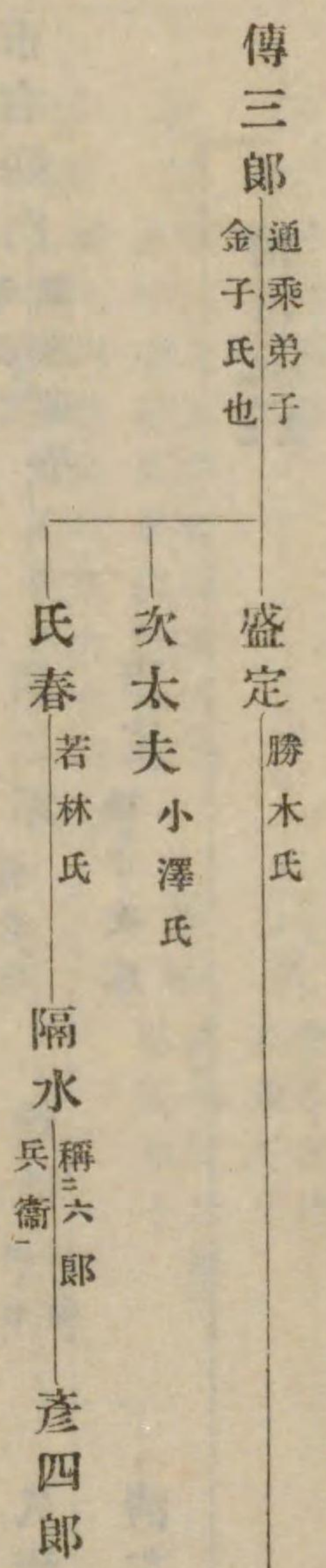
好榮

稱源次演乘弟子

○能州後藤氏系



○越中富山若林氏系



理房

稱庄次郎後改見二島田氏盛定弟子

理直

稱庄太夫後改見水

光定

稱藤太夫村上氏

兵次

川上氏

阿三次

渡邊氏○通龍按ニ盛定次太夫氏春ノ三人其姓異ナルヲ以テ見レバ金子氏ノ弟子ナルベシ又理房理直ハ父子ニテ光定以下弟子ト見エタリ但

○京師宗田氏系

又左衛門 太刀金具小柄筭白銀工宗乘同時人云

又兵衛

又左衛門

仁左衛門

仁兵衛 始爲納子工

又兵衛

始作五目納子

仁左衛門

納子工

又左衛門

入道號道清納子工

又兵衛

入道號道意

德直

稱又兵衛入道號道歸納子工上手

直道

稱又兵衛來住大坂入道號道直宗田氏彫物自此人始納子亦上手

傳八

德直弟子

四郎兵衛

同上後歸濃州岐阜

直重

稱又七

直峯

稱治助直道弟子

シ相弟子ニヤ、又師弟ト次第セルニヤ、スベテ詳ナラズ、今所聞ノマ、ヲ記ス、猶此類多カルベシ、幸ニ其鹵莽ヲ罪スルコトナカレ、

○同 植村氏系

安宣 稱忠左衛門野田氏

國長 稱九兵衛植村氏

宗峯 稱九右衛門國長孫

高房 稱九兵衛宗峯子

秀次 稱伊兵衛高房弟子

吉兵衛 宗峯弟子

富祐 稱佐兵衛高房弟子

利助 同上

與兵衛 同上

源兵衛 同上

○同 井上氏系

三郎左衛門

茂保 稱文次郎三郎左衛門五代孫

喜兵衛 茂保弟子

五郎兵衛 同上

九兵衛 同上

半兵衛 同上但同居弟子

伊兵衛 同上

○同 保井氏系

光定 稱後藤七郎兵衛後改隆乘

善長 稱佐兵衛古川氏光定弟子

高長 稱虎平父云平右衛門古川善長弟子

長常 稱高長弟子後稱一宮越前

壽秀 稱平右衛門高長弟古川善長弟子

高廣 稱平右衛門壽秀子

興道 稱藤助時岡氏壽秀弟子

敬道 稱權八久保氏壽秀弟子

○長州瀨城府鐔工中井氏系

光恒元祖 號乘寬隱士 明徳年中人住防州
山口鐔工創業

恒乘 稱新左衛門
恒之 稱文右衛門

信恒 稱文右衛門 元和年中
人當代自防州住萩府

友恒 稱佐兵衛
友幸 稱善助 但自當代專
作人物鳥獸屬

友恒 稱善助 自當代為 献上鐔工
山水人物等手籠鐔長州中興名工

友之 稱善兵衛
萩府細工町住

友信 稱彦左衛門 友之弟別宅
住所同上其銘以草字作之

○岡田氏系

埋忠明壽 京師人
已出

正知 稱彦兵衛 明壽
弟子住萩府

宣政 稱善左衛門 元祿六
年有故自當代改岡田

宣重 稱彦左衛門

政詮 稱彦左衛門

政勝 稱善左衛門

政富 稱彦兵衛

○同 仲原氏系

幸直 稱吉兵衛 正徳年中人金子幸仲弟子
始為彫工中等之作也

幸登 稱吉兵衛 初名幸久幸直男 上手也
師古作不屑問時匠自成一家鏝線頭之外彫刊各巧妙於是名聲日聞
故長州侯賜俸命使作 献上物於 東都屢見稱其工云今猶存在
已及知命

幸利 稱源左衛門 幸登男 其工
能繼父之名聲兼善畫

度之 稱源助中邑氏 幸登
弟子金具師兼彫工
幸良 稱半兵衛 吉山氏 幸登
弟子鞘師兼彫工

○同 岡本熊之允系

友治 稱惣次郎 後改次郎左衛門
萩府住慶長年中人

友光 稱喜平次 後改佐右衛門

友義 稱小兵衛
延寶年中人

方高 稱佐右衛門
後號枯喜 名工

方一 稱小兵衛
中等之作

知賢 稱熊之九 學工於東都時善彫物

○同 岡本藤左衛門系

友次 稱藤左衛門元祿年中人自江戶來住萩府本雖非 彫工好善之其名自顯仍長州侯賜俸行年八十沒 知義 稱甚左衛門年七十二沒

義勝 稱藤左衛門住蛭子町綠頭小 刀柄等諸彫物調進 獻上物 義次 稱藤之進義勝男弱冠學畫於雲谷某善之好彫人物山水鳥獸龍魚甚密

○同 藤井氏系

清風 稱源兵衛金子 幸永 稱源兵衛清風長子鏝綠 幸仲弟子始爲工 頭之外諸彫物各好巧密

幸貴 稱源右衛門幸永長子上手也 其工做乃父之巧密更加一等

○水戶玉川氏系

功阿彌 菊池氏 通壽 稱彦六 功阿彌弟子 美壽 稱三郎四郎玉川氏通壽弟子 正壽 稱文平 治三郎 文平弟

美久 稱太七美壽 甥而弟子 吉十郎 美久弟子

○京師岡本氏系

治國 稱傳兵衛京師人 尙茂 稱源兵衛治國弟子世稱鉄源初曰敏行

尙方 尙茂養子 稱源兵衛

重基 稱金兵衛久保氏尙茂弟子 武教 稱字兵衛重基弟子

○同 加藤氏系

隆乘 後藤氏 善長 古川氏隆乘弟子 義休 稱治兵衛善長弟子 時秀 稱治助義休弟子

○作州津山正阿彌系

勝三郎 白銀工 勝三郎 初稱五郎兵衛 七郎兵衛 勝三郎弟 吉久 稱平助後寓京師

平助 初稱平七

○同 中川氏系

五助 白銀工 五助 勝次 稱三助 勝久 稱三勝助 義克 稱甚兵衛

勝正 稱安兵衛

○同 千代氏系

久助 白銀工 久助 久助 初稱喜左衛門 千友 稱忠助

作右衛門 久助弟子 作右衛門 初稱勘兵衛作右衛門子

○江府岩本氏系

忠兵衛 橫谷宗根弟子 宗乙 稱忠兵衛至下手 良寬 稱與八宗乙子 宗寬 稱幸八實良寬弟

宗寬 稱五郎八實良寬弟子 昆寬 稱喜三郎實良寬弟子後養子トナレ

○同 荒井氏系

次郎兵衛 石川氏住神田 典容 荒井氏稱次郎兵衛石川氏弟子 典昌 稱小三郎典容子

○同 津氏弟子系

尋甫 稱八左衛門津氏 忠吉 野村氏初稱三辻平八尋甫弟子 正次 野村氏忠吉弟子

○加州象眼工小市氏系

永政 三郎右衛門 永重 四郎三郎 永次 彌左衛門 永國 彌左衛門 永次 彌左衛門

永次 彌左衛門

○同 永良系

永良 勘右衛門 永良 勘右衛門 永久 七兵衛 永久 源左衛門 永信 六右衛門

永信 吉太夫 永吉 長左衛門 永吉 喜内 永清 勘六 永定 次助

永光 半兵衛 永光 豐平 永次 豐次

○同 國永吉重井弟子系

國永 姓氏未詳稱次郎作寬永中人與弟吉重學彫於琢乘加州彫物祖云

國久 十左衛門 國久 十左衛門 國廣 與右衛門 國久 與右衛門

弟子 國安 與三右衛門 平國 三右衛門 國平 喜兵衛 國平 與三右衛門 國政 與三左衛門

國長 八左衛門 國忠 權左衛門

吉重 稱五郎作與兄國永以俗稱名于彫物各賜祿五拾俵後世以其名呼如姓 弟子 吉則 庄九郎 吉國 孫右衛門

森方 源四郎 吉國 長右衛門 吉次 八太夫 吉平 善右衛門

○同 勝木氏井弟子系

盛定 稱與三右衛門承應年間從伏見下住加州賜祿五十俵

弟子 盛定 與四郎 盛定 與四郎 盛光 稱勘右衛門改勝木半次郎

盛光 八兵衛 守良 惣左衛門 盛次 源左衛門 盛平 伊右衛門 盛國 藤左衛門

盛國 藤左衛門後爲鏝工

○同 定時弟子系

定時 稱平八姓氏未詳寬永年間從伏見下住加州賜祿三百石 弟子 定景 新右衛門 定次 吉六郎

○同 辻山城守弟子系

辻山城守 寬永年間從伏見下住加州賜祿百五十石 弟子 友重 助九郎 友次 三郎右衛門 重長 新七

重次 喜八郎 政平 勘七 政信 勘兵衛

○同 宗吉弟子系

宗吉 稱兵部正保年間從伏見
下住加州賜祿百石

宗次 次郎

宗長 九郎次

長重 九郎右衛門

長吉 久次郎

○同 忠平系

忠平 稱三郎兵衛正保年間從伏見
見下住加州賜祿五拾俵

忠清 庄太郎

○同 勝木氏并弟子系

氏家 稱權大夫寬永年間從伏見
下住加州賜十五人扶持學彫於顯乘云

氏家 市兵衛

兄弟家 稱市兵衛氏改金子
子為御細工人

弟子 氏永 喜兵衛

弟 氏屋 稱市郎右衛門
本家相續

氏長 喜兵衛

永清 後氏改田澤為
御細工人

氏次 六郎

氏宣 稱武兵衛
勝木氏

氏清 覺兵衛

氏賢 覺之丞 兄弟宗 三郎

弟 氏安 吉郎兵衛

氏安 吉郎兵衛

氏安 吉郎兵衛

氏吉 權之丞

氏安 稱權吉後
為彫物工

氏平 八郎兵衛

氏次 圓七後為
彫物工

弟 氏照 後改若林氏
春彫物工

氏照 吉郎兵衛
為彫物工

氏喜 稱市之丞
彫物上手

弟子 氏信

同 氏忠 八大夫

同 氏成 次兵衛

右ノ外加州ノ工人、猶多シトイヘ其系譜サダカナラズ、或ハ其名キコ
エザルハ、コレヲ略ス、凡加州ノ工人、其始多ク城州伏見ヨリ至ルヲハ、往

日 太閤秀吉公御居城アリシ頃ハ、今ノ三都ニモマサレル繁昌ノ地ナ
 ルニヨツテ、四方ノ名工多クアツマリ居レリ、シカルニ
 元和御一統ノ後、其地荒廢ニ及ヒ、工人等四方ニ離散スベカリシナ、加州
 ヨリ召レ、御扶持ナド下サレシ故、其子其弟子彼地ニ相續シテ、今カクノ
 如シト云ヘリ

○阿州平田氏系

丹齋 平田氏

氏直

稱正阿彌市左衛門蓋京師正阿彌某弟子也阿州象眼工以此人為祖

氏安

稱與八郎平田氏

安房

稱市左衛門平田氏下同

正安

稱與八郎○以上五代專作鏡象眼鏢未兼彫物

正親

稱市左衛門為津尋甫弟子兼彫物

長房

稱市左衛門彫物野村正次弟子

長秀

稱新五長房弟

○同 河野氏系

半兵衛

河野氏祖栗山左源太弟子世住德島實名時代等未詳此系皆以俗稱記之

五郎兵衛

藤兵衛

五左衛門

治秀

弟子 七右衛門

彌兵衛

五左衛門

宜秀

半助

弟子 半藏

○紀州金子氏系

吉之丞

丹州綾部產自幼京住云

義貞

吉之丞子

吉治

義貞子

忠長

利興

自此為紀州御抱

義光

後號恕元上手

義則

義光子有故承後藤近江守讓兼勤御所御用太刀調進

義安

義則子

右ノ外諸州彫工系譜、得テ盡クシルシ難シ、他日後編ヲ纂述シテコレヲ
 補ント欲ス、故ニ此ニ其手近ク知ルベキモノヲ舉タリ、覽者其全カラザ
 ルヲトガムルヲナカレ

補

○京師後藤氏系譜

此系已ニ前ニ出ストイヘ凡、別ニコレヲ舉ルモノハ見易カラシメンガ
爲ナリ、上後藤ワカレテ數家ナリシガ、或ハ其嗣立ザルアリテ、今其盛ナ
ルモノ八家アリ、其系左ノ如シ

元乘 光乘弟 琢乘 諱光宗 傳乘 諱光廣 乘巴 諱光俗 喜兵衛 諱光生

喜兵衛

長乘 俗稱七兵衛 立乘 諱光賴 海乘 諱光綱 隆乘 諱光定

光甫 稱七郎 兵衛 光浪 稱七郎 兵衛 沒後未立嗣

覺乘 諱光信 長乘子 演乘 諱光英 勘兵衛 達乘 諱光房 勘兵衛 實乘 諱光雅 勘兵衛

玄乘 諱光令 勘兵衛 光晴 勘兵衛

休乘 諱光忠 顯乘弟 運乘 諱光如 就乘 諱光隆 郎右衛門 光舊 稱源右衛門

光之 稱三郎 右衛門

○光舊マデハ京住ナリシガ、光之江戸へ下リ、本家ニ居ラレケルガ、四五
年前没セラレテ、其家督今猶定ラズ

林乘 諱光實 休乘子 法乘 諱光方 文乘 諱光數 光長 稱半左衛門

寬乘 諱光利 程乘弟 俊乘 諱光永 八郎兵衛 快乘 諱光勝 八郎兵衛 光興 稱八郎兵衛

光弘 稱八郎 兵衛

般乘 諱光富 寬乘弟 光黃 稱七郎 右衛門 光品 稱七郎 右衛門 光業 稱梅三郎

泰乘 諱光尙 廉乘弟 乘與 諱光近 體乘 諱光寄 治左衛門 七五郎

○彫工名譜

此名譜を編するに、凡彫工を呼來るに、姓名をつらねていふあり、又名ばかりをよびて姓の知れざるあり、或は姓名きこえず、俗稱にていふありて、一概に定がたければ、今其姓をすて、名の頭字を類聚して齒列す、たとへば、宗珉の如く、すべて頭に宗の字あるは、奈良宗貞も、埋忠宗義も、妻谷宗左衛門など、すべて、宗の字を頭とするものは、咸此下に收む、其他、利忠、安等みなしかり、又類字なきは、混雜の條にしるす、是搜索に便ならしめんが爲也、但し後藤の家、其同苗の諸工は、此類字に收めず、これがはじめに載る事、其家をたふとみてなり、此譜中父子師弟等の次第、系譜に見へたるものも、こゝに重出す、又其工手の品位を題せるものは、多年余が手にふれ、目を經たるにしたがひて、是を評する

所なれば、其當否を恐れざるにあらねど、凡これを業として、心をこれに用るものは、必ず其的をあやまるものにあらざれば、童蒙の目巧に志あらんには、先余が品題を心にふまへて、自己の才機を活用せば、其精に至るべし、是余が庶幾する所にして、此書を纂述せる微旨なり、

○後藤家并同苗諸工

祐乘

正奥 相傳以狩野元信下繪彫之云

装劔家にこれを元祖と稱して、其價甚貴し、此人高彫といふ事を創意せられて、其巧人爲に出ず、今これをものにたとふるに、峨眉天外雪中看と元美が評せしごとく、美にして善なるものなり、今其光景をおもふに、所謂未央の柳風になびき、太液の芙蓉露にそゝぐがごとく、品高く趣風流に遊ぶ人をして、心を温和ならしむるの徳あり、其鑿痕疎なるがごとく

にして密に、神機活動、實に此工の聖といふべし、其下世五月七日なるを以て、今に月々の七日に其監記を出さる、

二代 宗乘 武光 祐乘子

其おもむき、元祖に似て、出来よきものは、至てわかちがたし、かのあやめかきつばたの、にほひさへ濃からず、淡からず、時さへおくれさきだゝざるがごとく、鑑賞に精ならざれば、見あやまる事少からず、よく心を付べし、

三代 乘眞 吉久 宗乘子

其鑿のあとするどく、山高く谷ふかうして、凜然たる手際なり、目貫などは、金或は赤銅にても、地金うすく、上へはり出す、これを出といふ、おもふまゝはり出しても、地がね破れぬやうに、色繪を施すをうつとりと稱して、當時はやりたれど、今はこのまず、又は象眼など入るゝ事、此人に興り

て、家彫のうちにての異體なり、其工をものにたとふるに、越々たる武夫の干城となり、腹心となるがごとく、たけきうち、しほらしみあるの上手にして、畢竟は父祖の花を異にして、實を同うせしものなるべし、

四代 光乘 光家 一稱 祐伯 乘眞子

元祖のこゝろもちにて、上品に位ある彫なり、つよからずよわからず、其さまをいはは、松陰にやすらひて、櫻の花にむかふがごとく、やんごとなき上臈の柴の戸ぼそにたいすめるがごとし、

五代 德乘 光次 光乘子

所謂むつくりといふ彫にて、光乗の作に見紛ふもの多し、今これをいはい、春の海面遠く、おくれさきだつ真帆に、うすくこく、霞かゝりて、はしるさま見へぬがごとし、折紙を添る事、此時にはじまりて、下後藤も此代にわかれたりと、

六代 榮乘

正光德乘子

其趣頗^{スコフ}る光德^{リヤウセン}兩先生の鍊磨^{レンマ}を取あはせて、少しぼつとりといふ風なり、物にたとふるに、總角^{ソウカク}の野飼^{ノケヒ}をおひ、夕顔^{ユフカホ}さけるあたりに、御くるまたてたるがごとし、

七代 顯乘

正繼^{マサツグ}榮乘弟叙^ニ法橋位^{ホウキョウイ}始稱^シ理兵衛^{リヘイ}

光乗の手つきによく似て、雪のふりつもれるに、松と竹とのけぢめをかしう、其色かはらざるがごとく、みさほを^{マホ}守る心もちあらはれたり、寛永^{カンエイ}ろ、此人加州中納言殿より、祿百五拾石を下され、京師より、覺乘交代にて隔年金澤に在留す、しかるに、榮乘死去して、即乘幼年たるを以て、家督を相續せられて、^{祿を程乘に譲られし也、}

八代 即乘

光重 榮乘子

顯乘の風に似て、あらくと手づよく健^{スコヤカ}なる彫也世に三作といふは、祐光顯とあるべき所なるを祐光即と八代目の即乘を立しは、此人二十八

歳にて物故せられしゆゑ、其遺作^{ウイサク}世に多からざるを賞^{シヤウ}して、あながちに三作の一に入しものと思ふはしからず、名人にして稀^{マレ}なるがゆゑ也、長命^{チヤウメイ}にして鍊磨^{レンマ}を歴は、父祖にまさるべきと、賞して三作の一とせし事、鑑賞家の意地なり、一に通即光を三作といふは、元祖の作の神境^{シンキヤウ}及びがたき名工なりとのけものにして、これを三作といふなるべし、是又此道の

九代 程乘

光昌^{ミチヒカル}顯乘子叙^ニ法橋位^{ホウキョウイ}程或作^{ホウニ}呈始稱^{テイシ}理兵衛^{リヘイ}

此人の作甚だ奇麗^{キレイ}にて、品高^{ヒンタカ}く位^イそなはりて、誰^{タレ}が見ても作^{サク}の物と賞^{シヤウ}する彫なり、其時代今より遠^{トホ}からねど、光乗などの風ともいはん古色^{コシヨク}有少^{アリ}したがねめ深く、つよくあざやかなり、其光景江^{クワウケイ}に臨高樓^{リンカウロウ}の珠簾^{シュレン}をか、^{加州より顯乘に下されし祿を受けて、隔年に彼地に寓居せられしに、後屋敷を下され、今に其跡のこり}げて、秋の月を待がごとし、^{壺野石に伯牙の圖を彫し、程乗作の手水鉢あり、壺野石は、加州の名産にして、金澤城南の山中より出て、其質城州宇治石のこり、此山今は留山なり、即乘早}

十代 廉乘 光侶 即乘子
世せられ、廉乗幼少なる故、加州より賜る祿を、悦乗に譲りて、本家を相續せらる、此時代京師より下彫師を多く連下と云、

おとなしく大様なる所あり、かの光源氏の物語をよむに、明石の上の事を、しめやかにかきしおもかげともいはんか、殊に弟子あまたとりたてられて、壽も長かりし故、此作多く残り、其子光喜といふあり、甚巧にして、名人のいさほしたのもしかりしに、天折せられて、其作今至て稀なりをしむべし。

十一代 通乘 光壽 綱仙 乘子

三作の一にて、細工はでなり、花を彫れば匂ひきこえ、鳥をたくめば飛立かときづかはれ、人物などは、わらふがごとく、むつまじくものいひかはさんがごとく、言外の妙あり、むかし偃師といふ工、周の穆王に献せし人形の歌舞をなせしといへるは、一時の戯れにからくりたくめるものに

て、是は彫琢自然の活機にして、人の目をうごかすにあらず、人の心よりうごくと見るの妙なれば、萬世の至寶といふべし、豈賞して且たふとまざらんや、

十二代 壽乘 光理 通乘子

通乗の作と違ひ、今の光孝の出来物の位なり、よく其道をまもり、功を全くせし作といふべし、かの常山の蛇にはあらねど、首をた、けば尾にこたへ、尾をうてば、かしらにひきて、勢其中に在といふがごとく、作なり、

十三代 延乘 光孝 此自身 彫附 此極 彫附 判 壽乘子 稱四郎兵衛

今は、いからず、其作を評せんに、時によりて出来不出来あるにや、よく出来たるは通乗の如にて、目巧を苟せざれば見あやまるまでの妙なるは、誠に箕裘をおとさる所に、して、天の此家に私し給ふ事、名工の徳といふべし、元祖世を去り給ひ、已に貳百六十餘年におよびて、其代其人の作

物年々に秘ヒミて其價アタヒ日々に貴タフトく權貴ケンキの御重寶チヨウハウとなる事、其子孫代々名工
 出イデて、元祖ゲンソの業ゲフを潤色ジュンシヨクせらるゝによれり、是ひとへに
 聖代セイダイに逢アヒて、刀劔タウケンの徳トクをたふとみ、これを裝飾サウシヨクして其威キを増マスのめでたき
 ためしに、後藤氏ゴトウシの家の君が代とゝもに、たえずおとろへざる事、松栢ショウハクに
 いはひ、鶴龜ツルカメにちぎりて、盡ツキざるとそ、此コレを生業セイゲフとする、おのれらがタイカウ大幸と
 いふべし、今はからず、其工のほどを品題ヒンダイする事、としごろの冥加メイカを報ムクふ
 の漫言マンゴンなれば、見ん人、これを罪ツミする事なかれ、

十四代
 光守ミチモリ 初名光偉稱吉五郎改四郎兵衛二月家督
 橋壹丁目住 天明四年甲辰十二月家督

已ゼンに前條ゼンジョウに述ジュツするがごとく、奕葉エキエウますく盛サカンにして、世を逐オツて名工の出
 る事、珍重チンチュウするに堪タヘたり、今十四世の宗匠ソウシヨウたるや、竊ヒソカに其作サクを鑑カンるに、祖父
 通乗ツウジョウの綺麗キレイなるに、先工センコウの整精セイセイなるを兼カネて一家イカを開ヒラけり、其自得ジトクの場バに
 至シては、煙雨エンウを青幃セイシヤウに望ノゾみ、霞彩カサイを澄江チヨウコウに瞰ミルがごとし、自然シゼンに

昭代セウダイ名工メイコウの氣象キシヤウをあらはす事、他工タコウの企及クワツクぶ所オコにあらず、

後藤同苗諸工

同苗ドウメウの譜フ第テイ前マヘの系ケイ圖ズに著アといへども、猶見易ヤスからしめんが爲タメ、こゝに贅ゼイす、其品題シンダイガキに至ツては、言繁コトシゲければ、後編ゴヘンに譲ユりて、これを略リョクせり、
昌乘イヤガキ

昌乘

元祖の弟にて、納子ナクゴの名人なり、

元乘 孫

喜左衛門シヨウと稱し、光乗の弟なり、

琢乘

諱イミナは光宗ミツムネ、孫左衛門シヨウと稱す、元乘ゲンジヨウの子なり、

加州大納言殿御召ノシにて金澤カナザハ又能州ノウシウナ七尾ツチに在留ザイリウし、後京師カヘルに歸カと云々、

石乘

諱ミツツネは光經ミツツネ、喜左衛門シヨウと稱す、琢乘タクジヨウの子なり、

傳乘 孫

韓ミツヒロは光廣ミツヒロ、宇兵衛ウヘイと稱す、石乘の弟なり、

光利 孫

孫左衛門デンジヨウと稱す、傳乘チヤウシの長子

乘巴

諱ミツヨは光俗ミツヨ、喜兵衛シヘイと稱す、傳乘の二男なり、

光生

喜兵衛キヘイと稱す、乘巴の子なり、

長乘

七郎兵衛カミと稱す、德乘の弟なり、上後藤のはじめ、

立乘

諱は光頼ミツヨリ七郎兵衛と稱す、長乗の子なり、

覺乘 綱

諱は光信ミツノブ勘兵衛と稱す、立乗の弟なり、寛永の頃 加州黄門より三十人扶持下しおかれ、京師より顯乗と交代カウタイにて隔年カクネン金澤に在留す、

乗圓 綱

又左衛門といふ覺乗の弟なり、

乗仙

又左衛門といふ乗圓の子、

昌乘

諱は光政ミツマサ市郎右衛門と稱す、乗圓の弟、

乗蓮

諱は光成ミツナリ伊兵衛と稱す、乗仙の弟、

乗清

源八と稱す、乗蓮の弟、

善乘

諱は光則ミツノリ瀬兵衛と稱す、乗蓮の子なり、

光質

一郎右衛門と稱す、昌乗の子なり、

寂乘

源實又源乗といふ、覺乗の子なり、

演乘 綱

諱は光英ミツヒデア勘兵衛と稱す、寂乗の弟なり、覺乗死後其祿を襲オサひ、悦乗と交代にて、金澤に在留す、其頃加州御用向ムキの彫工彼地チに多きによりて、御免オンを得て、京師にかへり、子孫今に 加州より三十人扶持を下さる、

光平 爽

十右衛門と稱す、演乘の弟、

光武

三左衛門と稱す、光平の弟、

達乘 飛

諱は光房、勘兵衛と稱す、演乘の子なり、

實乘

諱は光雅、達乘の子なり、

光令 燧

勘兵衛と稱す、實乘の子なり、

益乘 緋

諱は光治、立乘の子なり、

嶺乘

諱は光親、源四郎と稱す、益乘の子なり、

清乘 緋

諱は光長、權兵衛と稱す、立乘の弟なり、

順乘 緋

諱は光明、權兵衛と稱す、清乘の子なり、

秀乘

諱は光豊、權兵衛と稱す、順乘の子なり、

光教 四

權之介と稱す、順乘の弟なり、

益信

采女と稱し、洞雲と號す、法橋位に叙す、探幽法印養子と成、畫を善す、彫物

に於ては、多く見へず、後はやめられしにや立乗の子なり、

海乘

諱は光綱ミツツナ、三郎四郎と稱す、益乗の養子

隆乘

諱は光定ミツサダ、七郎兵衛と稱す、海乗の子なり、

光維

七郎兵衛と稱す、隆乗の子なり、

休乘

諱は光忠ミツタカ、源兵衛と稱す、顯乗の弟、

運乘

諱は光如ミツユキ、源右衛門と稱す、慶乗の弟、

就乘

諱は光隆ミツタカ、三郎右衛門と稱す、運乗の子なり、

光舊

源右衛門と稱す、就乗の子なり、

源太郎

就乗の子なり、

慶乗

諱は光詮ミツノリ、源兵衛と稱す、初作乗ハジメと云、休乗の長子、

林乘

諱は光實ミツサネ、半左衛門と稱す、運乗の弟、

法乘

諱は光方ミツカタ、半左衛門と稱す、林乗の子なり、

光信

綱

半左衛門と稱す、法乗の子なり、

光敷

光信ミツノブの弟なり、

即清

庄三郎と稱す、即乗の子なり、

良清

良重ヨシシゲといふ、小判座をつとむ、程乗の子なり、

悦乗ツキノリ

諱は光邦ミツクニ、理兵衛と稱す、程乗の子なり、程乗の名跡マイセキを嗣ツギ加州より賜タマはる、百五拾石の祿を襲オクひ、演乗と交代にて、隔年カクネンに金澤カナザハに在留し、中年におよび御免を得て、江府に住す、其子孫今に故モトのごとく加州より祿ロクを下さる、

光治

源一郎と稱す、

光倍

理兵衛と稱す、悦乗の子なり、

寛乗

諱は光永ミツナガ、後光利ミツトシと改め、八郎兵衛と稱す、程乗の弟なり、

俊乗

諱は光永ミツナガ、八郎兵衛と稱す、寛乗の子なり、

快乗

諱は光勝ミツカツ、八郎兵衛と稱す、俊乗の子なり、

般乗

諱は光富ミツトミ、七郎右衛門と稱す、寛乗の弟、

作重郎

般乗の子なり、

光黄 魚

七郎兵衛と稱す、作重郎の子なり、

仙乗 四

諱は光清ミツキヨ、太郎右衛門と稱す、般乗の弟なり、

源之允

諱は光壽ミツタケ初光唯といふ、仙乗の子にして、廉乗の養子となる、

泰乗 魚

諱は光尙ミツヒサ、治左衛門と稱す、廉乗の弟、

乗與

諱は光近ミツチカ、泰乗の子なり、

光奇

治左衛門と稱す、乗與の子なり、

乗賢

諱は光喜ミツヨシ、源四郎と稱す、廉乗の子なり、貞享元年四月十九日没す、二十九

歳、

光幸 魚

源次郎と稱す、乗賢の弟なり、

光佐 魚

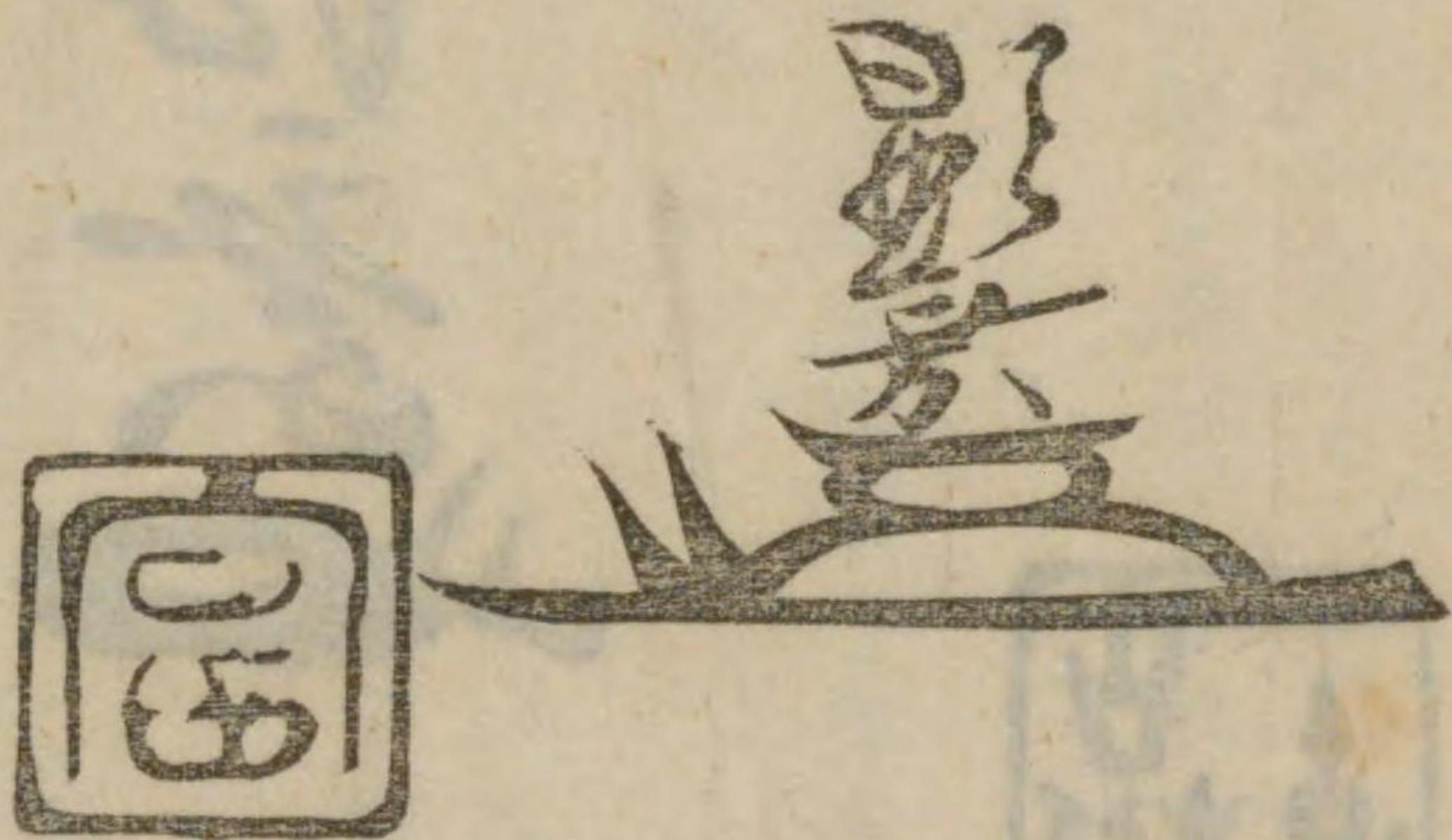
唯吉と稱す、壽乗の子なり、

光偉

天明四年甲辰十二月ニ家督トナリ光守ト改ム
吉五郎と稱す、光佐ミツスケの弟、

光典

顯乘七代

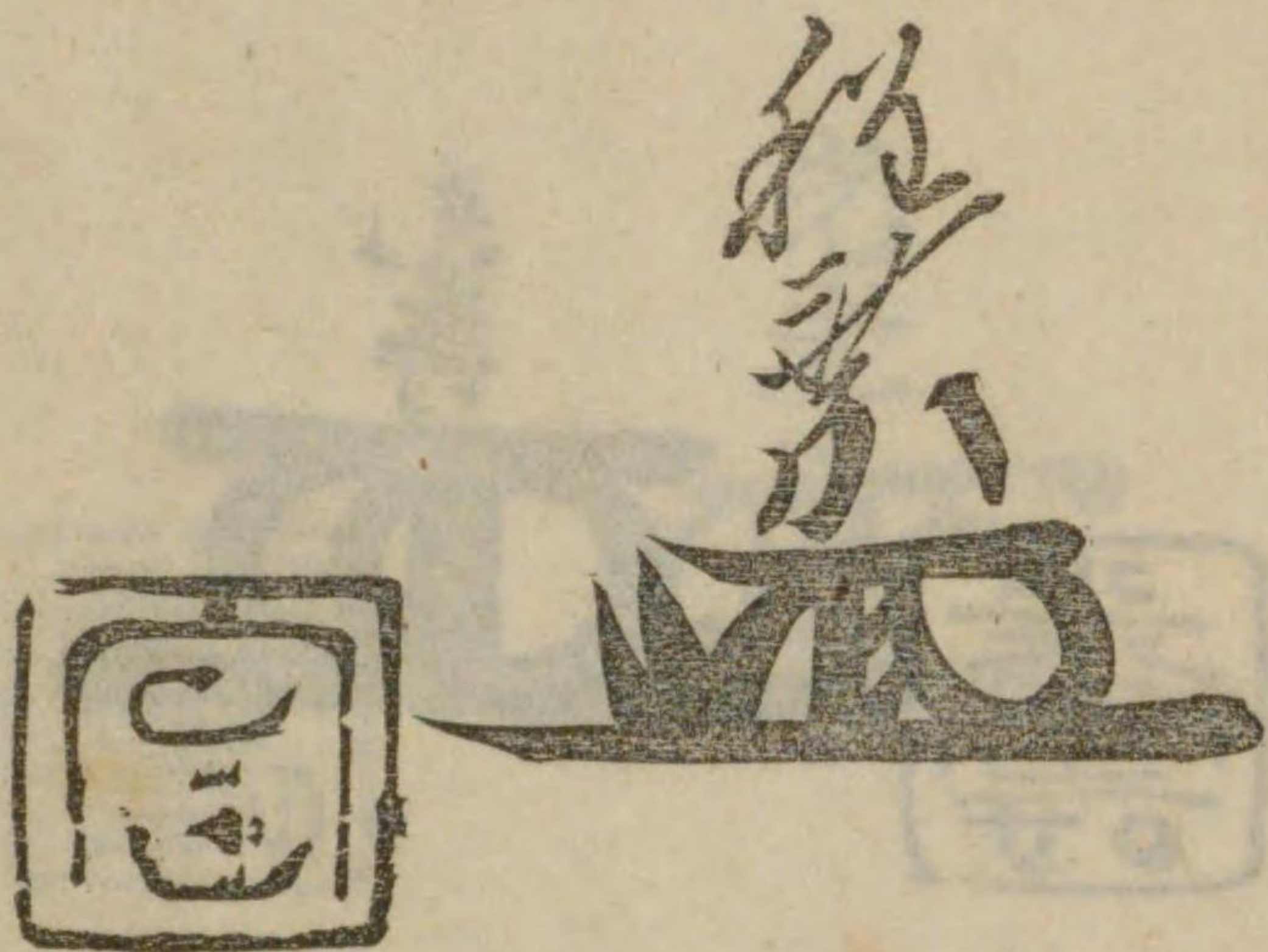


即乘八代

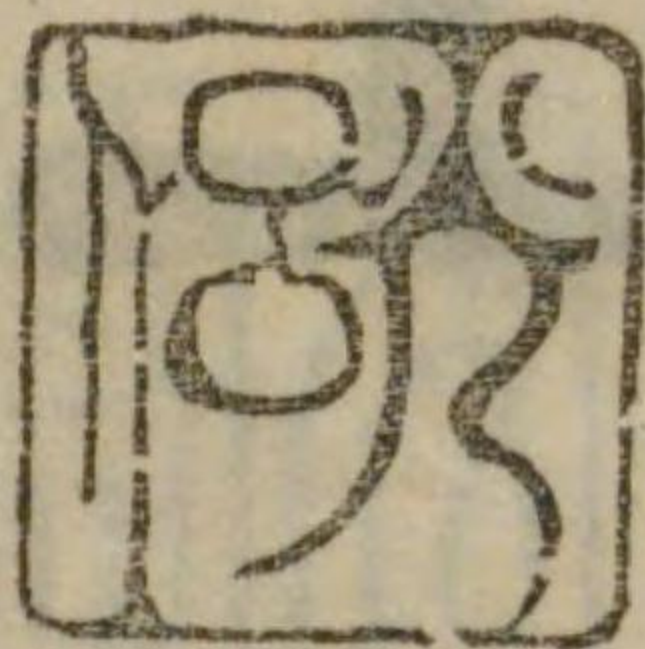


徳榮顯即四代此裏判を用ひられしと見へたり顯乘はかりは程乗同やうの判用られし事もありしよしにかゝりにや

程乘九代



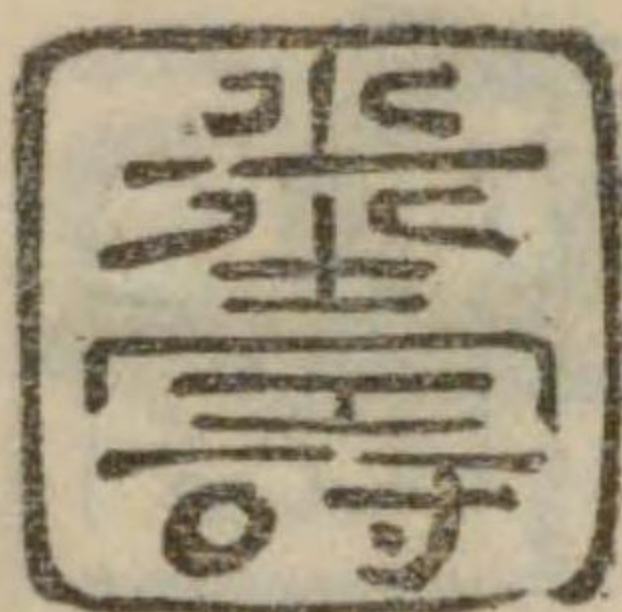
廉乘十代



通乘十一代

光壽

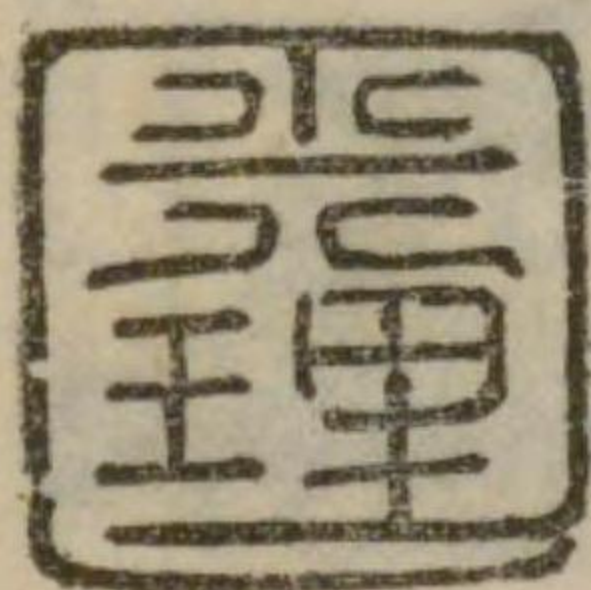
五



壽乘十二代

光理

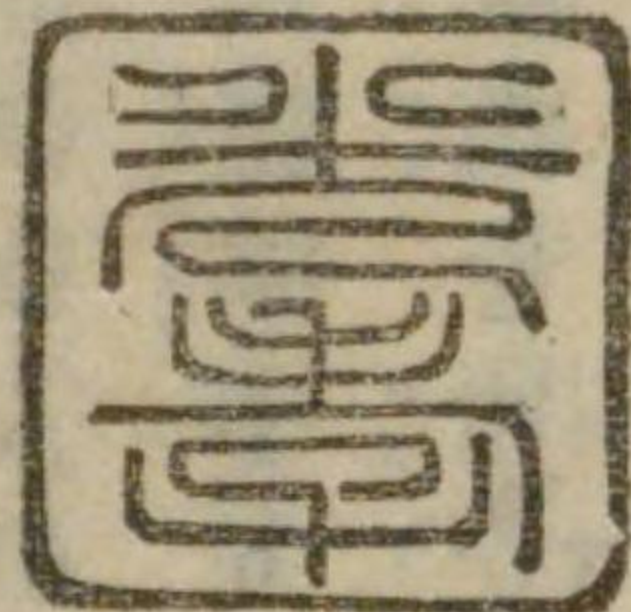
五



延乘十三代

光孝

五



桂乘十四代

光守

五



右折紙に用る所の花押印記等、各本紙を模寫する所にして、毫も差ことなし、是此道をこのむ人の、尤知べき緊要なり、前にもいへることく、折紙の出る事、五代目徳乘より起れり、よりて此にこれをしるして、當代に及ぶ、凡十四代の次第を暗記せんには、祐宗乘光徳榮顯、即程廉通、壽延と指を屈して、これを稱すれば、容易覺らるゝ事、誰もしれる所なれど、猶童蒙の爲にしるせり、

装劔奇賞卷之二終

浪華 稻葉通龍新右衛門著

装劔奇賞卷之三

彫工諸家名譜

宗與 横谷氏名盛次稱次兵衛(京新町武者小路住)寛永年中下江戶正保年中被仰付御彫物御用頂戴 御藏米貳百俵二十人扶持住神田此曰祖父宗與

上手なり、家風をよく得て、頗にがみある作也、

宗知 名次貞稱次兵衛 宗與家督勤御用貞享四年没

宗珉 名友常號遜菴俗稱次兵衛 宗知家督勤御用後辭御扶持享保十八年没

横谷氏の中興にして、世に名人と稱す、よく家風を彫て、作にまざるゝものあり、珉これをいとひ、其名を後世にのこさん事を、ねがひて、探幽法印にたより、或は英一蝶にちなみて、下繪をもとめ、はじめに繪風銀金とい

宗

ふものを創意サウイして、遂ツヒに一家イツカをなせり、是江府にて町彫マチボリといふものゝは
じめ也、此翁オキナの工タクミの凡ボンならざる、其志ココロ高く、其畫趣グワシユ清淡セイタンにして、水碧ミヅドリに沙明イサゴアキラカ
なるに、遠山エンザン月ツキを帶オビ、連峯レンホウにほひをふくみて、其景倒エンノサマサツに鑿ウツルがごとく、人ジン爲キの
及フウチばざる風致クダカサあり、

宗興 名友貞 江戸神田住横谷氏宗珉の子

上手なり、父の風をよくのみこみて、おとらざるを、いかなるにや、近年キンキン其
賞スコフ頗オチルる減ゲンず、しかれども固凡手モトボンシユにあらざれば、其名カナラズ必發カタすべし、

宗珉 名友次 當代

明和三年、父宗興隱居して、家督ツグを嗣、上手也、
宗峯 植村氏

京都御池通富小路東へ入町に住す、俗稱ヨビナは升屋九右衛門といふ、武者人
物一流の彫工也、
ホリテ

宗堅 尾崎氏

重兵衛と稱す、後藤程乗の弟子、

宗徹

藤中氏、後藤榮乗の弟子、

宗武

埋忠氏

宗永 岩本氏稱平次

江戸麴町六丁目に住す、

宗峯 盛

桐木氏、京都北野大將軍に住す、

宗印 吉岡氏 江戸住

手際テギバさつぱりとして力あり、氣象キシヨウあらはれて拙ツタナからず、至て上手にして、

名人イイジンに亞ツクべき作なり、

宗顯 野村氏俗稱宗九郎包教弟子

江州彦根の人、一に幽明子イウメイシと號す、

宗寛 岩本氏俗稱幸八 江戸麴町住良寛弟也後良寛弟子五郎八子トシ宗寛
ト名乗ラシム

前彫は岡邑榮宜と銘す、

宗貞 奈良氏

俗稱は才市といふ、江府神田に住す、奈良彫物の元祖なり、但其始ハジメは御塗スリ

物師モノシの家より別る、

宗有 奈良氏稱四郎兵衛

御飭御用カドクを勤、越前と稱す、江府神田に住す、此人景色ケイシヨクを彫ホルに上手なり、

宗典 喜多川氏二代目

江州彦根の人、藻柄子サウヘイシと銘す、しかるを世俗ソコ或はあやまつて、モガラシと

よむものあり、一笑に堪たり、

宗左衛門

妻谷氏ウメタニ、薩州の人、後江戸に住す、

宗兵衛

右宗左衛門の子なり、

宗介 紀氏 江戸住

明珍大隅守と稱す、信家ノブイヘの末葉バツエウと云、よつて信家作ノブイヘの鐔ツバ、又は冑鉢カブトノハチに折紙オリガミ

を出せり、

宗久

藤田氏圓右衛門と稱す、埋忠信房ウメタノブサの弟にて、藤田の家を嗣ツクぐ、加州金澤の

人なり、細工手コウジテつよく、鮮明センメイにして、上手といふべき位なり、

宗房

藤田氏、丈助と稱す、ムネヒサ宗久の弟、金澤木、新保町に住、兄と並稱すべき上手なり、

宗吉

象眼師なり、シヤウホリネンカン正保年間伏見より加州金澤に移る、ウツ祿百石を賜ひ、ヘウブ兵部と稱す、上手なり、

宗次

兵部の弟子
次郎と稱す、加州金澤象眼工、

宗長

同上
九郎次と稱す、加州金澤象眼工、

宗義

埋忠氏、タチバナムネヨシ橘宗義と銘し、カズマノスケ數馬助と稱す、大阪の住、

宗益

井上氏

上京狩野辻子に住す、

宗由 カ

江戸住、

宗理

其姓未詳、嘉平次と稱す、宗珉の弟子なり、松平肥前守様御抱カクになる、

宗則

其姓未詳稱辨之助 京師住鐵屋源兵衛の弟子

宗利

鑄工なり、其銘を見るに、オモテ表に土佐國住明珍宗利、ムネトシウラ裏に神道五鐵鍊と題す、キタヒ鐵の冶至て上手なるものなり、

利

利治

奈良氏稱三郎兵衛

江府に住す、手際清楚にして氣象あり、上手といふべし、

利永

奈良氏

七郎左衛門と稱す、江府神田に住す、

利光

奈良氏 稱七郎左衛門、江戸山伏井戸住

宗閑と號す、七十二歳にて没す、利永の子なり、

利壽

奈良氏太兵衛と稱す、江府本所に住す、利永の弟子なり、名人

其細工家風にも、横谷風にもあらず、草花鳥類等、甚しほらしく、世競ふて一流と稱美す、已前より縁のこしき、貳三分ある縁など、當時はやりし故、奈良風を擬する人多く、數品あれども、此人の手際に於ては、企及ぶべからざる奇巧あり、しかるを近年奈良彫のしほらしきものには、必ず利壽の銘を彫るもの見へたり、是燕石の玉に似たるたぐひにて、ナカハシ和氏のマキ一

顧に分るべし、

利隨



江戸神田の住、其姓未詳、矩隨の弟子、

利國

江府の住、奈良風なり、

利助

植村氏

京富小路御池下町に住す、俗稱升屋利助といふ、宗峯の弟子、

利長

姓氏居住等未詳

藻出の鯰などの縁頭に此銘間見へたり、

利光

姓氏等未詳、江戸住、但シ前ニ出タル奈良利光トハ別人

利貞

氏等未詳、佐渡人

鑄工なり、透無地とも、鐵の治甚だ精良にして、工亦至て上手なり、

重

重右衛門 黒瀬氏

後藤廉乗の弟子、

重次

岩井氏茂右衛門と稱す、後藤廉乗の弟子、

重吉 埋忠氏京師人

初重義ハジメシゲヨシといふ、義満公ヨシミツに仕へ奉る鑊縁頭ツバフチカシラなどを作る、上手なり、

重吉 埋忠氏京師人

彦二郎と稱す、明壽メイジュと號し、將軍義昭公ヨシアキ、豊臣秀吉公オヨ及び關白秀次公オヨに

仕ふ、彫物は希代キタイの上手なり、鑊ツバ又劍ケンをも打し人にて、今に至て、これを珍チシ重す、

重義 埋忠氏

彦二郎と稱す、法橋位ジョウに叙し、明真メイシンと號す、刀劔タウケンの銘メイには、家隆イヘタカと切キれり、此

外他國ウヘタクに、埋忠ウチタウを姓ウヂとする彫工テウコウあるは、皆此家の弟子筋スヂなるべし、

重長 新七と稱す

重次 喜八郎と稱す、辻山城守の弟子

右共トモに加州の象眼工ゾウガンなり、

重基 久保氏

京都佛光寺新町に住す、俗稱鐵屋金兵衛といふ、始武教ハジムケウと銘す、鐵屋傳兵衛の弟子、

重廣 吉岡氏

江府に住す、奈良風なり、吉岡の元祖、

重光 大森氏 江戸金龍山下住

與市と稱す、英昌エウサウ前彫マエボリに銘する所なり、

重光 中村氏

半七といふ江戸の住、

重治 奈良氏

重兵衛と稱す、江戸の人なり、利永トシナガの弟子、

重啓 匹 奈良氏

江戸に住す、

重綱 渡邊氏

重賢 佐々木氏 京師住寛永年間人

重二郎 姓氏等未詳 京師本満寺辻子

重勝 正阿彌 住所等未詳

重信 姓氏未詳俗稱喜太郎京師住鐵屋傳兵衛の弟子

乘

乘意



奈良氏

江戸金吹町に住す



前彫ノ印 如此ナリ

此人初奈良太七と稱して、奈良善三の弟子なり、一イツに一サン蠶堂永春といひ、
後杉浦仙右衛門と改て、深川御屋敷に住すと、其彫工鍛錬精到、已に名人
の域に至れり、奈良風の一變にて、肉合彫ニクアヒボリと云ものを創意せり、是を其師
家にくらぶるに、所謂青は藍より出で、藍よりも青アヲきの類にて超凡テウハンの奇キ
工コウなり、其鑿つき直にして、氣力キリヨクをふくみ、これを掌上テノウチに翫モテアソベば其妙を視、こ
れを刀劔タウケンに装へば其品ヒンを高タカウする事、誠マコトに名人の境キヤウといふべし、

乗圓 藤井氏

後藤廉乗の弟子なり、

乗知 佐々木氏稱庄兵衛 京師兼町住後藤勘兵衛の弟子

乗竹 磯野氏京師住

俗稱升屋文右衛門寛延の比小左衛門と改む、

乘光 四井氏 大阪菅田町善菴筋住

俗稱升屋宇兵衛京師升屋喜兵衛の弟子也、

忠吉 野村氏

辻平八と稱し、江府に住す、津尋甫ツノジンホの弟子なり、

忠義 五 江府住

地磨ヂミガキにして、傘カラカサに冠カウムリなどの彫物あり、縁頭フチカシラなど随分こしきひくし、奈良風なり、

忠兵衛

江府の人、宗珉の弟子也、

忠七 小田氏薩摩谷山住

鐵物師テツモノシなり、刀豆ナタアの鏝ツバなどを彫事イッカ一家也、

忠平

三郎兵衛と稱す、加州金澤象眼師也、正保の頃伏見より彼地に移ると祿五拾俵を賜ふ、

忠清

庄太郎と稱す、加州金澤象眼工なり、

忠好

京師の人、鏝工なり、

忠道 五

京師の人、

忠連 佐々木氏

三郎兵衛と稱す、大阪玉造タマヅクリに住す、

安

安親



奈良氏本姓土屋江戸神田龍閑町

俗稱彌五八、後東雨と號す、奈良辰政の弟子也、至て上手にして、利壽に似て、同じからざる曲者なり、たとへば光琳の梅を畫き、千鳥を筆するがごとく、他畫の梅千鳥にくらぶれば別様あれども、誰が見ても、梅といひ千鳥と見るがごとく、奇をこのみて、妙に詣れり、是又近年贋造多く出れども、中々庸手の擬すべき手際にあらず、具眼のものは、其眞贋忽に辨すべし、

安親

初安信と名乗、奈良東雨の子にして、父におとらざる上手也、江戸に住す、

安重



布施氏稱三郎、後藤即乘弟子

安光



奈良氏江戸住

安宣

野田氏

光

忠左衛門と稱、京富小路押小路上町に住す、

安道

橋氏 讃州高松研屋町住

彌右衛門と稱す、上手也、高松侯御扶持人、

安之

江戸住

安兵衛

渡部氏 京風呂辻子

光行



菊岡氏 江戸神田堅大工町住 柳川直光弟子、俗稱利藤次、號獨甫

上手なり、横谷風にして、やはらかに品高し、しのすいき露おもたげなれど、さすがに地に臥ざるがごとく、たわゝにして力ある彫なり、

光政



菊岡氏

江府の人、光行の弟なり、

光



如、此アリテ其實未詳

赤銅の縁など、地磨チミガキ至て見事なるに、洲流スナガシに鷺サギの類を彫ものあり、

光英 三上氏 江戸淺草觀音寺内住

柳川直光ナホミツの弟子なり、

光林 拵ナホ 大月氏 鑿アトキの痕奇麗レイにして氣象スコヤカも健ツヨクなる上手なり、於尾陽オノノ名古屋、旅宿ニ作ル之ヲと銘

するもの間あり、

光重 埋忠氏

京都西陣に住、

光成 青柳氏 江戸數奇屋川岸住

良光前彫の銘にして、稻川氏の弟子なり、

光慶 江府の人、

光守 後藤氏

此後藤氏、いづれの別ワカれにや未詳、大體の作なり、

光國 阿部氏

俗稱升屋義兵衛、京富小路御池上町に住す、

光春 坂元氏

俗稱升屋嘉兵衛、京富小路御池上町に住す、生類人物を彫事をこのむ、

光行 京師の人、

光貞

伊右衛門と稱す、宗珉の弟子なり、勢州津ツの人、

光秀 上田氏

七郎と稱す、其子も同七郎と呼、越前州片町カタに住す、

光政 水野氏

源六と稱す、多光の弟なり、加州金澤南町の住人、鑿の痕、清楚にして、甚巧なり、

光章

加州金澤の住にて、甚右衛門と稱す、能登後藤甚右衛門の子なり、

光悦 藤本氏

傳十郎と稱す、悦乗の弟子なり、加州金澤の住にて、上手なり、手際健にし、て、見事なる彫なり、

光定 村上氏

藤太夫と稱す、越中富山に住す、

光永 次

京師に住す、

光曉

濃州住光曉と銘あり、縁の天井まで金着にして、秋の野などを至て深彫にす、

光政

光伸

右共に上に同じ、世に是を美濃彫といひ、或は美濃後藤などとも稱する、事詳ならず、但元祖祐乘此國の産なれば、もしくは其後冑などの支流に、や知るべからず、今美濃彫といふは、商家よりいひ出せしなるべし、

光恒 大月氏 京師小川夷川住

俗稱山城屋喜八、光林十九世孫と云々、

光義 次 西村氏 京師高倉竹屋町住

俗稱笹屋源助、大月光恒の弟子上手也、

光品

後藤氏稱七郎右衛門

光籌

同 喜兵衛

光長

同 半左衛門

光辰

同 七郎兵衛

光豊

同 勘兵衛

右代々上京室町頭後藤辻子に住す、これを上後藤といふ、同苗彫なり、各前の家譜に載すべきを、いまだ其系譜詳ならざれば、姑く類字によつて此に列せり、くはしくは、後篇に出して、其工をも品題すべし、

光友

後藤氏

右いづれの後藤の支流にや詳ならず、銘に、於江州彦根彫之行年六十三歳と見へたり、

芳

芳章

刃

田中氏稱五左衛門

江戸湯島天神下住後藤利兵衛光倫弟子

至テ

芳信

五

百壽軒ト號ス

江戸神田永富町俗稱市十郎

芳宣ト銘アルモノ同

知

知義

長州萩の人上手なり、

知隨

濱野氏 江戸神田鍛冶町住

金左衛門と稱す、後鋪隨と改む、政隨の弟子也、

知眞

彌七といひて、京師の産なり、後大阪に住せり、

其

其阿彌

姓名居住等未詳鏝工也

其友

姓氏居住等未詳

地磨イデに藻出コヒアルヒの鯉エビ或は海老フチカシラマなどの縁頭間見ゆ

如

如竹



村上氏 江戸住増上寺新門前

其はじめは鏡アヱの象眼師なり其父も同是を業ウツとす此人の象眼に於オては一流といふべし至て上手にして群グンを出イづ今名に因ヨてこれを評せば竹の外直ホクシナホにして中虚ムナシく一點テンの障サハリなきがごとく工ウツマずして自然シゼンの工あり其葉ハの涓々ケンケンとして清風セイフウを含フクみ見るものをして涼シヤウからしむるの奇致キチあり、
如箏サウ サツバ 竹サツの名にて、多タく見ミへぬ字ジなれども、字ジ典テンに出イたり故コにこゝにシるす、猶後考を待のみ、

如鐵

是も象眼師なり手際奇麗にして、如竹にまがふもの多し、如竹の弟子にて後子となる也。

如水



如竹の娘にして、世に娘彫ムスメノゾリといふ、其字未詳、

加茂氏孫山光堂と銘す、京師の人、

如柳

如竹弟子江戸芝神明前住

如柏

如竹弟子 俗稱和助 江戸赤坂田町住後改松英 上手ナリ

如泉

如竹弟子ニヤ未詳象眼ノ物見エタリ

如篤

草字にてぬぎに作るもの、篤の字なるべし、江戸人

直

直政



柳川氏後法名宗圓ト名ク

三左衛門と稱す、江府神田の住、初吉岡氏を師とし、後宗珉モツトモチヤウの弟子となる、甚だ上手なり、但人物を彫る事をこのます、其最長モツトモチヤウたる所は獅子也、是を横谷獅子と賞して、一流とせり、或は野馬等亦妙スグレなり、其手際奇麗なる事

納子に至るまで、精到力あり、石はしる瀧のあたりに、紅葉のさかりなるを望ノゾムがごとく、見事にして、すごき所あり、尤珍重すべきものなり、

直光 柳川氏江戸神田住

利兵衛と稱す、直政の弟子也、柳川風にして、恰アタカも直政手つきによく似て、さらに横谷風をかねたり、鑿タガネの跡つくろひなく、勢イキホヒの屑イサギヨキタツトを尙シヤウび、其瀟洒シヤウシヤたる事、淺茅アサヂの上に、村雨ムラサメのそゞがごとし、直政死後、三左衛門と改め、後別家サツガリと云々、

直克 稻川氏 江戸神田永富町住

文四郎と稱す、直克の弟子能其工を得たる横谷風にして、至て上手なり、

直矩 小中村氏

金四郎と稱す、直政の弟子なり、江戸の住、

直好 佐野氏 江戸白銀町住、秋本侯の御抱

利八と稱す、直矩の弟子なり、横谷風にして、其品ムシ高く上手なり、

直久

姓氏俗稱未詳、直政の弟子なり、江戸の住、

直春 柳川氏稱小平次

直幸の子、江府神田に住す、

直利 森川氏稱久次郎 江戸神田濱松町住

彫物師なれども、納子を蒔マクこと名人といふべし、

直舊 尾崎氏稱要八 江戸新橋惣十郎町住

家風に似て、龍又は獅子を彫ホル事、別して巧者也、

直孝 柳川直政弟子 江戸住

直隨 遠山氏 江戸淺草大音寺前住

傳藏と稱す、矩隨の弟子なり、

直常 加藤氏 江戸神田三河町

市郎兵衛と稱す、

直幸



柳川氏稱小平次直政弟子 江戸人此人柳川直政ト銘スルモノアリ

直次

清水氏稱甚右衛門 江戸住直政の弟子柳川小平次直春の實父也

直之

江戸住

直政

尾崎氏

初は喜右衛門、後に孫左衛門と稱す、江府數寄屋川岸南さや木町住、其彫奇麗にして、氣象つたなからず、古にはぢざる名人尤家風に精し、

直次

京師住

直道



宗田氏 大阪住

又兵衛と稱す、後入道して道直と改む、その先京師の人、父を徳直といふ、人物を彫る事上手なり、高彫肉合彫等、至て見事にして力あり、但賣物に出す仕入の物は、其作大におとれり、

直重



宗田氏 大阪住 彫物師

直道の子にして、父の名をおとさる上手也、

直峯



宗田氏 大阪住

治助と稱し、一山齋と號す、直道の弟子也、

弘良

桑村氏 加州金澤住盛良弟程乘弟子上手

佐左衛門と稱し、古工と號す、大聖寺飛驒守様より祿百石を下さる、後浪人し入道して淨空と稱す、

弘次



姓氏居住等未詳

序克



菊池氏

稻川直克の弟子江府下谷根岸住、柳川流にて、高彫の上手、毛彫は一流也、

手際ものずきより、品の高きまで、よくとゝのひたる事、仰出にいへば、智勇兼備といふ心持ならん、

序光 菊池氏稱伊右衛門

序克ツネカクの弟子にして、江府神田に住せり、柳川流の毛彫タケミに巧タカミにして、甚うつくしくやはらかに、きれいな彫也、恨ウラムラくは、其勢頗スコフるゆるめり、

序春 江戸神田住

長 一宮氏

柏屋忠八と稱して、滅金師メツキニシの弟子なり、初雪山ハツセツサンと銘メイして、後越前大椽ノチと受ジュ領リヤウを下され、一カンに含章子シヤウシとも號し、京都麩屋町二條下ル所に住せり、此人の彫工の妙なる實ジツに天然テンネンといふべし、其初筭ハツサン或ナは土筆蝸牛蛙等ツクノシカタツブリカハツの生寫シヤウウツシものをこのみて、人をして目を驚オドロかしめ、次第テウタクに彫琢ジに自由イウを得エて、縦横ジウワウ

心のまゝに、龍或は獅子、又は人物など、時に臨リンみ需モトメに應オウじて彫出ホリイダす事、奇々妙々當世の神工シンコウといふべし、故に世の賞玩シヤウクワンも亦大かたならず、いは田毎タゴトの月のながめ異コトなれど、姨捨山ヤバステのみね高き心もちより出て、其手際テギバの自由オモムキに、趣ヒシタカキの品高きまで、恐オソラくは其右ミキに出るものあるべからず、豈賞アニして且珍カッチンとせざらんや、

長義 京師人後住大阪

長常の子にして、よく其妙をうかひ得たる上手なり、

長春 江戸住

乘意風也、真鍮シンチウの縁頭チウなど多く見へたり、

長重 象眼工

九郎右衛門と稱す、加州金澤象眼工宗吉が末流とぞ、

長吉 象眼工

久次郎と稱す、同加州宗吉が末流なり、

長兵衛 姓氏未詳 江戸馬喰町四丁目

菊をしづめ彫にする事上手なるをもて、世に長兵衛菊と稱美す、其工今傳て三代也、

長房 平田氏稱市左衛門 阿州徳島紙屋町住正親の子野村正次の弟子

久則 暹塚氏稱文次 江戸小石川住水戸大學頭様御家中なぐさみ彫也

其細工至て精く、兩面の色繪分の一流、甚だ細密なるをあざやかに仕立られし所、外に及ぶものなし、近年贋物多く出れども、凡工の決して似得べき所にあらず、真物は妙なるもの也、

久薫 江府住

久清 加州金澤住後藤七兵衛詮清の子

上手なり、葡萄に蜂などの縁頭、殊に出來物也、

久助 千代氏 作州津山住

鑿の痕奇麗によく調ひたる上手なり、

政隨 濱野氏 江戸神田大工町住

太郎兵衛と稱し、乙柳軒又は驪風堂、或ハ閑徑又ハ味墨、龜峰齋などの數、或

吟諷と銘せるも見へたり、奈良利壽の弟子なり、其彫一流をなさねども、

第一手づよきをこのみて、氣象をあらはし、さつぱりとして勢あり、是も

仰山にいへば、虎嘯は風おこり、龍吟すれば、雲を起すのこゝち見るにこ

ろよく爽然たらしむ、

政光 金子氏 加州金澤在住後京師ニ歸ル前田近江守殿ヨリ貳拾人扶持下サ

吉之丞と稱して、九代日程乗下彫工の中にて、格別の上手也、但此金子氏

其系未詳世に聞へし金子氏は其祖を吉之丞義治といひて、光乗の弟子なり、歴々の庶流よしなれども、彫工に名譽を揚られ、子孫今猶連綿たり、其五代目利興 紀州様御細工人となれり、義治事、錯て名譜に脱せり、故に、に附記す、委、後篇に出す、

政守

五

細野氏

京小川二條上ル

宗左衛門と稱し、毛彫象眼といふものを創意して一流をなし、高彫色繪等各妙ならざる事なく、誠に工中の英物なり、昔郭林宗が人となりを評せしに、隠不違、親貞不絶、俗といへるがごとく、何となく其品高く、徳そなはれる所あり、是鍊磨を経たる上手の至る所ならん、

政晴

麟風堂と號す、江戸の住、

政恒

菊川氏

江戸に住す、其手際奇麗にして力あり、上手といふべき彫琢なり、

政重

五

姓氏未詳江戸人

政長

六

同上

政應

同上

政春

國岡氏

國岡氏政春酒樂作と銘す、江戸の住、

政徳

正阿彌

埋忠氏

市郎兵衛と稱す、京都西陣の住、

政昌

正阿彌

播州赤穂の住、


政平

勘七と稱す、加州象眼工辻山城、守末流、

政信

勘兵衛と稱す。政平の子なり、


正

正長  奈良氏 利永弟子

清六と稱す、江戸淺草御門内馬喰町四丁目に住す、其手際奇麗にして力あり、薄に螻螂ス・キ、又は秋の野など、殊にしほらしく上品也、此人の彫琢は、疎密を兼て、よく鍛鍊カネしたる上手なり、

正程 橋部氏


後藤程乗の弟子なり、

正治  富士氏 江戸西久保永井町住上手なり

正親 奈良氏 同 横山町三丁目住正長の子

清六と稱し、初は乗和といひて、乘意の弟子分となる、正長没後二三年は正長とも銘を切、後又正親と銘す、乘意は其伯母チカ賀なるを以て、弟子分と

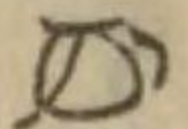
なれるなるべし、其工は父に及ばねども、亦庸工ヨウコウにあらず、

正敷  奈良氏正長弟子 江戸兩國駒留橋住號三菊壽齋

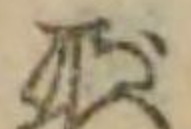
善二と稱し、初江戸にて正次といひ、中頃正幸と名乗、後正敷と改、一に龜光クワウとも銘す、老後大阪に來り住す、螭龍アマリヨウを彫に妙を得て、一流をなせり、

正間 河原氏 江戸小傳馬町二丁目住

徳左衛門と稱し、奈良正親の弟子なり、

正虎  西川氏

江戸赤坂畔クロク鋏谷に住す、鋸工の上手、

正重  奈良氏 江戸八丁堀邊住

新太郎と稱す、奈良正親の弟子也、

正次 野村氏阿州俟御抱

江戸京橋に住す、野村忠吉の弟子、

正信 伊藤氏

俗稱鑄屋太助、京師新町松原下^ノ所に住す、鑄師なり、

正恒 伊藤氏稱^ニ甚右衛門 江戸神田住御鑄師 一流元祖

細透鑄の作に於ては獨歩の名工といふべし、

正方 伊藤氏 江戸神田住

細透^{ホツズガシ}すき彫鑄工なり正恒の子、

正伯

江戸に住す、毛彫工なり、

正尹 ハ

江戸に住す、正尹^{マサタケ}と篆文^{テンジ}にて銘す、

正親

いまだ何許^{イツノトコロ}の人なるをしらず、奈良正親^{マサチカ}とは別人也、

正元 磯野氏 京御池柳馬場東へ入

俗稱升屋小左衛門、

正伯 磯野氏

俗稱住所等同^{ジニ}上、

正入 同上 京二條麩屋町西へ入

俗稱小左衛門後小兵衛と改、

正博 同上


初正勝^{ノマサカツ}と銘す、俗稱住所並同上、

正克

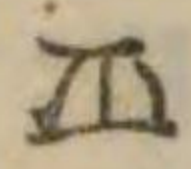
其住所未詳、其彫を以て推^オすに、京彫の上手と見ゆるなり、上京の人なるべし、

正國 肥前唐津住

鏝ホッヅカシなど細透の上手なり、

正則  平尾氏 備後福山住人

地がねあつく、てつつりとせし彫なり、江戸の町彫の心持にて、地磨地石目等をこのむ、いまだ納子地のものを見ず、

正種  津田氏 京都烏丸八幡町に住す

俗稱白銀屋彦兵衛とて、白銀師の上手也、彫物師にはあらず、縁頭、目貫、小柄、鏝などの直ナホしものをする事巧コウシヤ者也、

正次 

江戸芝新錢座に住、

正國 姓氏未詳 江戸住細透鏝工

正侶 姓氏未詳 備前岡山住

無垢ムク入縁頭ヰなど至て見事なり、

正安 平田氏(五代目ナリ) 阿州徳島紙屋町住

與八郎と稱す、象眼工なり、

正壽 玉川氏 常州水戸鍛冶町住


文平と稱す、美壽ヨシナガの子なり、後江戸淺草に住す、父におとらざる上手にして、甚だ奇麗に器用キヨウなる作といふべし、

正則  村上氏 江戸芝宇田川町住

唯七と稱す、如竹クダクの弟にて象眼高彫ともに上手なり、しかれども其位クラキは如竹クダクに下れり、

正勝 姓氏未詳 下總國佐倉住初唐津中比小田原ニ住スト云々

正次 松村氏 江戸住

正道  姓氏居住等未詳但シ、阿州侯ノ御抱ニ野村正道トテ、江戸住ノ人アリ此花押ヲ銘スルトハ、別人ナルモ知ルベカラズ、識者正シ玉ヘ、人ア

正親 平田氏稱市左衛門 阿州徳島紙屋町住津尋甫の弟子阿州御扶持人

信

信時

安堂氏

平七と稱す、尾州名護屋大津町の住人なり、赤銅地磨、高象眼むく入など、甚だ見事にして、結構なる事、蜀錦にまされり、人あらそひて是をもとめ、たのみ來る人、門前に市をなすがごとし、生得一癖あるをのこにてこれイチをいとひのがれて京師に遊び、終に其名をかくせり、其作物たまくツヒに出れば、價必ず貴し、最もをしむべきは此人也、アタヒモツト

信方

江戸住

奈良彌五八を學べり、其姓俗稱等未詳、

信益

主水モンドノツカサジユ司從六位下、主水ノサクワン令史原井氏など銘す、其居住等未詳、

信清

江戸住

信房

埋忠氏

清之丞と稱す、加州金澤の住、桑村古工の弟子なり、手際奇麗にして古色コシヨクあり、上手といふべし、サビ

信重

奥州會陽、住正阿彌藤原氏と銘す、俗稱未詳大體の作なり、アヒツツ

信安

後藤氏

與左衛門と稱す、大阪伏見堀貳丁目に住す、フシミボリ

信經

姓氏未詳 奥州仙臺住

此人の作、別して細金無垢入物上手なり、ホツガネムグ

陳

陳孝

奈良氏 江戸小傳馬町貳丁目新道住

伊八と稱す、正長前彫マヘボリの銘也、

陳喜

英

英昌

大森氏 江戸淺草三軒町住俗稱與市直政の弟子

一に幹支間の銘あり、大森流の元祖上手なり、

英秀

大森氏 住所同上今淺草柳橋住英昌ノ弟子ニシテ後子トナル

喜惣次と稱す、世に大森一流と稱するは、此人より盛なり、其彫琢岩をつ

んざく勢ありて、しかも甚奇麗也、四分一に浪などの深彫至て見事に又

梨子地の深牡丹の類は、真似のならぬほどの妙あり、宗珉の一輪牡丹を

擬して、創意せられしものと見へたり、武者物殊に妙也、

英精

横谷氏稱伊右衛門 江戸新橋守山町住後改宗祐宗與の兄

至て上手なれども、其作世に不多ば知人稀也、

英精

二代目 現在 江戸京橋太田屋敷住初石川久藏ト云寫物ノ上手後邑珉ト號ス

上手なり、此人彫琢の手利にして、達者なる事およぶものなし、たとへば、小刀柄などを頼むに、興に乗すれば、其まゝ、鑿を弄びて數柄を作る事、奇々妙々、傍に人なきがごとし、

英茂

英精子稱己之助 初銘宣貞

英辰

大森英昌の弟子 江戸淺草住

英幸

英

江戸に住す、

英知


英盈

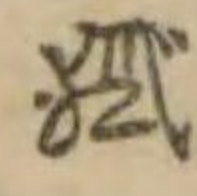
英雲

右共に江戸に住す、

英

川上氏稱半十郎 阿州徳島紙屋町住

英直  姓氏居住未詳

英次  横谷氏 江戸人

古英精の弟子にて、後養子となる、

常珍  古川氏 現在

元珍の子にして、江戸馬喰町三丁目に住す、鑿つき奇麗にて、上手なり、其工父にまされり、鍛花匠なり、間亦高彫のものも見及へり、

常成 辻氏

孫助と稱し、樂水堂と號す、江州國友村の人、辻丹治從兄弟なり、臨川堂の風をよく擬して、人々賞せしに、早世せられし、是に餘年を假さば臨川堂におとらざる名工と稱せらるべきに、遺憾少からず、

常和 奈良氏 江戸住


喜六と稱す、彌五八の弟子なり、

常重 川村氏 江戸神田住

市右衛門と稱す、初關口了嘉と銘す、

常定

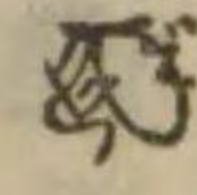
江戸神田に住す、菊池序克の弟子なり、

常克 


江戸住俗稱姓氏未詳、

常榮

同上、


常隆 

姓氏居住等未詳、

常直 

久兵衛と稱す、長常の弟子なり、攝州高槻の産にて、後京師に住す、

常道 姓氏未詳 京師人

常勸  篠崎氏 常州水戸白銀町住

勝國の子なり、庄三郎と云、後雪軒と號す、

清次郎 後藤氏

其名未詳加州金澤の住、後藤市右衛門の子なり、其作を見るに、奇麗にして力あり、上手といふべし、

清左衛門 後藤氏

是又名乘詳ならず、加州金澤に住して、久清が弟也、細工は上手にして、珍重すべき所なり、

清冷 後藤氏


七兵衛と稱す、久清が子也、加州金澤袋町に住す、是又上手にして賞すべき彫工也、

清定

其姓未詳、奥州仙臺魚屋町に住すと、其作甚見事にして上手なり、

清吉 島村氏 江戸神田橋本町住

直利の弟子なり、納子を蒔こと上手、

清安  伊藤氏 江戸住

墨繪様の象眼など頗る奇也、但し如竹風也、

清助

尾州名古屋長者町の住、姓名未詳、

清乘 後藤氏

利兵衛と稱す、江戸淺草堀田原の住なり、江戸にて廣東鐔の作人、

清吉 後藤氏

江府兩國横網に住す、後藤清乗の弟子、鐵に象眼を施事、別して妙々、其外何にても、うつしもの、上手なり、

清久 松井氏

長州萩府の住、鑄工なり、

清七 姓氏未詳、鑄屋ト稱ス 大坂南、糸屋町骨屋町住

鑄工の上手なり、

尹

尹泰

右は彫工の名にあらず、江戸神田龍閑町に住す、伊藤三郎兵衛といふ小道具屋の物好にて、矩隨風の彫工をえらみて、これを製せしめ銘する所也、尹泰の字は、伊藤の旁を割取たるものとぞ、

尹重 姓氏未詳 江戸住

孫七 姓氏未詳 尾州名古屋住、清助の弟子

孫四郎 姓氏未詳 備前岡山住、白銀師上手

有秀 姓氏未詳 長州萩住

有重 奈良氏 江戸住

尙茂 岡本氏 京佛光寺通室町住

俗稱鐵屋源兵衛といふ、鐵源 鉄屋傳兵衛の弟子也、初名敏行といふ一に正樂の號を銘せるあり、近代獨歩ともいふべき名工なり、第一鉄物を治す事、古來其右に出るものなし、もとより金銀赤銅四分一など、各鑿痕奇麗

なる事ヘンジアン半時菴ホツクが發句ホツクに出る日を松にはかせて初ざくらとかかけしきど
りし風情フゼイなり惜哉フシイカサ安永九年にはかに没ボツせりしかれども其名今イマに高く
其作シヤウクワシますく賞玩シヤウクワシせり

尙房 姓氏未詳 俗稱鐵屋文次郎鐵傳の弟子 京師

尙茂ナホシゲの養子となり後鐵屋傳兵衛へ歸る

尙道 姓氏未詳稱庄助 鐵傳の弟子 京師

尙方 同上稱長兵衛 尙茂の弟子後爲養子改源兵衛

尙友 同上稱伊兵衛尙茂の弟子

尙房 姓氏居住等未詳 鐵屋文次郎ト同名別人ナリ

則

則虎 姓氏未詳 江戸住

則久 同上 同上

如竹風の象眼工なり

矩

矩隨 濱野氏野ノ字壁ニ作レリ俗稱忠五郎江戸神田小柳町住

政隨シヤウズキの弟子なれども乘意風の肉合彫なり近年外にても此人の作ナソラヘに擬ギ
すれども決して及ぶべからず

矩最 中澤氏 矩隨の弟子歟 江戸住

装劍奇賞卷之三終

198
3
403

